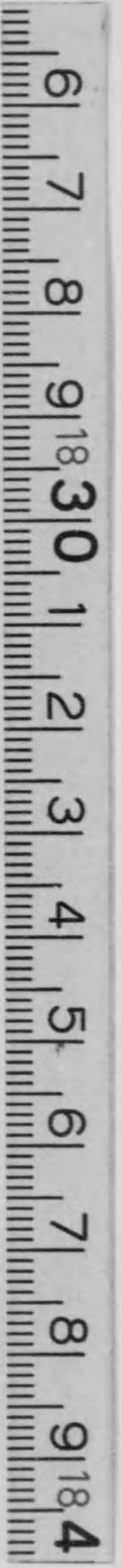


271  
91



始



271-21



わが子の金銭教育

麓

三

郎

著

大正  
7. 6. 4  
内交

## 序

或る家庭にあつた事實を申し上げます。

その家には一人の男の子と二人の女の子とがありました。そして其の子供達にはお小遣として毎日一人前一錢づつ與へることになつてゐました。子供達は其の一錢でお菓子とか果物とかいふやうなものを買ふのでした。然るに其の中の一人が或る日腐つた果物を買ひました。それを見つけた母親は早速その果物を捨てさせました。けれども、もしこれが家人の目に觸れないで子供の腹中に入つてしまつたとしたら、それこそ、どんな災難を惹き起したか分りません。

母親は子供にお金をやるのを止めました。そして子供の食べたがるお菓子の類は一切母親の手から與へることにしました。子供は現金は一切手にしないこととなりました。

これは果してよいことでせうか？

この問題を私は世の教育家諸君及び子を持たれる親御達の前に提出いたしましたと思ひます。子供が腐つた果物を買ふのは非常に危険なことです。しかし子供が全然お金と絶縁するのは尙ほ危険です。なぜといふに「如何な風にお金を使ふのが一番賢いか」といふことを悟らなければ、「如何すればお金が儲かるか」といふことを知ることが出来なからです。そしてもしも是れを知らずに世渡りをしようと思へば、それこそ惨めな世の劣敗者とならなければなりません。申すまでもなく、子供の頃の教育は成長後の性格の基礎となるものです。子供

の時受けた感銘及び智識は、いつの間にか堅い果實となつて、その人の一生を支配する力となるのです。それであるから、金錢に對する正當の觀念を子供の時分から養つて置かなければ、成長後非常な不幸を惹き起します。

然るに世の教育者は此の大切な金錢教育を忘れて、徒らに空虚な道徳ばかり説きたがります。わが子の眞實の發育を望み、わが子が精神上にも物質上にも世の優者となることを望む親達は、このやうな偽善的教育に満足して居られるでせうか。

前に申した家庭の主婦も此の事に氣がつかしました。そして、その後は以前の通り毎日一人前一錢づつ與へることにしました。しかし毎日一錢づつ渡したのでは、金錢教育上効果が少ないと思つて、日曜日に一人前七錢づつ與へることにしました。そして、その七錢を一週間分のお小遣として各自自由に使ふこと

を許しました。勿論放任主義ではありません。母親は陰ながら子供のお金の使ひ振りをよく見てゐるのです。各自小遣帖をもつけさせました。男の子は一度に七錢貫つたのを喜んで、早速一冊三錢の手帖を買ひました。一番末の女の子は、その七錢を非常に珍重して少しも使ひませんでした。

さて、次ぎの日曜日がきました。母親は各自の小遣帖を調べました。そして、改めて一週間分の七錢を皆んなに渡しました。男の子は、其の時、此の制度の不平等を訴へました。何故かと云ふと、男の子は七錢貫つた日に其の殆んど半分を使つてしまひ、その翌日一錢更に其の翌日に一錢、その次ぎの日に一錢といふ風に消費したので、木曜日には一文無しになつてしまつたからです。即ち、金、土の二日はお菓子を買ふことが出来なかつたからです。

しかし母親は此の男の子の失敗を反つて喜びました。何んとなれば、此の男

の子が、一度に三錢使つた失敗は、この男の子にとっては、金銭教育の上に非常によい効果を齎すからです。男の子は最早このやうな失敗はしないでせう。尠くとも、此のやうな失敗に對して用心深くなるでせう。然るに、世間には、廿五六歳になつて、初めて此のやうな失敗に狼狽する人も少くないのです。

一番末の女の子は、僅か二錢だけ使つたので、その餘りの五錢は貯金するやうに母親にすゝめられました。しかし女の子は貯金を喜びませんでした。そして「そんなら使つてしまつた方がよかつた。」と吐きました。申すまでもなく、此の女の子は貯金といふものに關する眞實の觀念を持つてゐなかつたのです。貯金するよりも、いま使つた方が自分の得であるかのやうに思つてゐるのです。しかし是れは世間一般の子供の考へであります。皆さん、この微妙な子供の心理を何と考へられますか。これは教育上看過すべきことでせうか。このやうな

心理を無視して、たゞ無暗に勤儉貯蓄をすゝめる學校や家庭は、果して正しい  
でせうか。子供に貯金をすゝめるには、先づ子供に貯金に關する正當の觀念を  
授けてからでなければ何の役にも立ちません。

皆さん、ちよつとした家庭内の一些事にも、金錢教育上これだけの意味を見  
出すことが出來ます。それが親の方針一つで、子供を優者の道に導くか、劣敗  
者の道に導くか、そのいづれかになるのです。近頃の新聞紙を見ましても、不  
良少年を生んだ家庭は、この大切な金錢教育をまるつきり等閑に附してゐたこ  
とが分ります。

しかし表面は極めて些細なことでも、この子供の金錢教育といふことは、極  
めて難しい問題です。親が當惑しなければならぬ問題が、思ひがけないところ  
に潜んで居ります。本書は此のやうな難關を切りぬけるためには、最も參考に

なるものであると信じます。そして、本書を讀まれることによつて、子供の金  
錢教育の如何に大切なるものであるかといふことが、世間一般の教育家や爲政者  
や家庭の主人主婦の方々にお分りになれば、これに越した喜びはありません。

本書は米國の州立師範學校教授エドウィン・キルクバトリック氏の『金錢の活  
用』といふ本によつて編んだものですが、米國の事情を知る助けにもと思つて、  
米國にあつた實例をそのまゝ引いてきて、わざと日本化しなかつたものも澤山  
あります。この方が却つて、一般の讀者の利益になることが多いだらうと思つ  
たからです。

著 者 識

# 目次

第一篇 家庭内の金銭教育	5
第一章 金銭教育の必要	11
愛児に金銭教育を施す親は少い	11
毎日に金銭は大切になる	16
子供は金銭の出入を見る機会が少い	10
金銭の眞の役目は何か	11
金銭教育は單なる「金銭」の問題ではない	14
金銭教育は實際を重んずる	16
第二章 金銭の觀念の發達	17
わが子の金銭教育	17

子供は金銭を如何なるものだと思つてゐるか……………一七  
 子供は何故貯金を喜ばぬか……………二五  
 金銭そのものに価値があるのではない……………二八  
 大人でさへも金銭の眞の価値を知らぬ者がある……………二九

第三章 平常の金銭教育……………三〇

あやふやな金銭教育は子供を誤る……………三〇  
 道徳的に金を使はせる親もある……………三二  
 家庭の金銭問題を子供に聞かせる利益……………三三  
 子供には子供の財産を持たせるがよい……………三六  
 子供にお金の使い方を教へる親は殆んどない……………三八  
 一定の金額を子供に持たせてみるがよい……………三九

第四章 金銭上の喜びと悲しみ……………四〇

子供の欲望を尊重せよ……………四〇

第五章 小遣錢に就いて……………四一

お金を使ふ経験を積ませよ……………四一  
 小遣錢は子供の自由に使はせるがよい……………四二  
 いろ／＼にお金を使はせてみるがよい……………四三  
 子供の奢りを防ぐにはどうすればよいか……………四三  
 子供に貯金の利益を飲み込ませるのは難しい……………四六  
 子供の買ひたがるものは何か……………四七  
 子供に自由意志を發達させよ……………四七

第六章 お駄賃とお祝儀に貰ふお金……………四八

お駄賃やお祝儀をあてにする子供もある……………四八  
 心附けの害……………四九  
 幾歳になつたら與へる金額を一定するか……………四九

第七章 定額の 小遣錢……………五〇

わが子の金銭教育……………五〇



貧乏な家庭の方が小遣錢にだらしない…………… 104  
 小遣錢の金額はどうするか…………… 106  
 年頃になつた少年少女の感情を考へよ…………… 109  
 子供に借金を許してよいか…………… 101  
 小遣錢は貸銀であつてはならぬ…………… 103  
 自分で案を立て、お金を使ふやうにさせるがよい…………… 106  
**第八章 子供のお金儲け**…………… 108  
 なぜ子供はお金儲けを好むか…………… 108  
 子供の世界にも樂あれば必ず苦がある…………… 111  
 子供は無報酬で働かなければならぬこともある…………… 112  
 仕事をするしないは子供の自由に任せるか…………… 116  
 子供に給料を拂つてもよいか…………… 119  
 子供を奮發させるやうな言葉…………… 123  
 なぜ年頃になれば學校をやめたがるか…………… 124

經濟的に價値ある仕事にのみお金を拂へ…………… 124  
 家庭外の仕事をどうするか…………… 127

**第九章 子供の仕事の實際**…………… 129

賣 子…………… 129  
 農 事…………… 131  
 其他の方法…………… 133  
 子供の仕事に伴ふ犯罪…………… 135  
 子供のお金儲けは絶対に必要か否か…………… 137  
 子供の仕事の利害…………… 138  
 お金を儲けた代表的な實例…………… 147

**第十章 貯金のこと**…………… 149

多くの親は貯金を迷信的に有難がる…………… 149  
 貯金の眞の意味を理解せよ…………… 150

貯金を無理強じする弊害……………一四四  
子供に普通な貯金の方法……………一四七

第十一章 子供の金銭上の責任

子供の金銭上の責任とは何か……………一四九  
所有と責任……………一五〇  
罰と賠償とを區別せよ……………一五一  
子供の行爲を裁判するときの加減……………一五二  
他人のためにもお金を使へ……………一五三  
子供の金銭上の責任に關する代表的な實例……………一五四  
どんな目的で子供を罰するか……………一五五

第十二章 衣服を買ふこと

子供は必要品を買ふ氣を起さぬ……………一五六  
子供のお金を全部必要品に費はせるのはよいか悪いか……………一五七

買物の訓練はどうすればよいか……………一六二  
買物上手になれ……………一六三  
子供の豫算はどうするか……………一六八

第十三章 計算

なぜ計算が必要か……………一七一  
幾歳のときから計算をやらせるか……………一七二  
家庭本位の計算方法……………一七三

第十四章 家庭の共有金銭

家庭の共有金銭から起る危険……………一七四  
家庭全體の利益を本位とせよ……………一七五  
金銭の出入を共同にする利益……………一七六  
金銭問題と他の問題との關係……………一七八

第二篇 家庭の外の金銭教育

第十五章 子供の貯金機關

政府で貯金の便宜を計れ……………二二五

學校の貯金獎勵の方法……………二二八

學校内の貯金機關……………二三九

校内貯金の實例……………二四〇

お金を賢く使ふことを教へよ……………二四三

貯金獎勵の結果……………二四五

第十六章 學校の算術と金銭教育

算術の目的と缺點……………二四七

なぜ算術教育の効果がなないか……………二四九

實際と理窟との調和……………二五一

事務の智識を缺くな……………二五三

第十七章 算術の應用

改良しなければならぬこと……………二五五

最も手近な問題を擇べ……………二五八

有勝もの誤り……………二六〇

實際に役に立たぬ教授法……………二六八

實際算術……………二七一

花畑の設計……………二七三

圖畫上の計算……………二七五

實際的判斷が必要……………二七七

稽古のための計算だけでは足らぬ……………二八〇

摸擬と眞の仕事……………二八二

第十八章 家庭と社會

一人だけの經驗では足りぬ……………二八五

わが子の金銭教育……………二八五



わが子の金銭教育

目次

10

格言と物語の教訓……………二六六

子供にはどんな質問を出すべきか……………二六七

家庭の豫算を子供に研究させよ……………二七〇

投資のことを考へさせよ……………二七一

世間をも研究せよ……………二七三

第十九章 米國の青年會……………二七五

穀物俱樂部の設立……………二七五

富が増せば社會も進歩する……………二七六

少年俱樂部の道徳上の功勞……………二七七

俱樂部は何故成功したか……………二八〇

金銭教育は人生教育……………二八一

完成俱樂部……………二八三

—をばり—

## 第一篇 家庭内の金銭教育

### 第一章 金銭教育の必要

#### 愛児に金銭教育を施す親は勤い

「あなたは、子供の時分、どんな金銭教育を受けましたか。」

斯う突然に聞かれた場合、大概の人は答へます。

「さあ、金銭教育と云つて別に受けませんでしたねえ。」

もしまた

「あなたは、どんな金銭教育を、あなたの御子さんにしてゐらつしやいます

か。」

と尋ねられても、多くの人は矢つ張り

「さあ、金銭教育と云つて別にしては居りませんが……」

と答へるであります。

どんな親でも、何かの序に、偶然に、金銭の道を教へることはあります。しかし、金銭に關する一定の教訓を其の子に與へる親は殆んどありません。

同様の質問を學校の先生の前に出して御覽なさい。先生は斯う答へるのが常です。

「學校では其のために算術といふものを教へてゐるのです。」

さもなくば

「學校では儉約貯金の道を教へて居ります。」

尤も子供に儉約貯金の道を教へることは、是れまでも随分實行されてきました。しかし、子供の金儲教育が如何に大切なものであるか、また、子供が幾歳のとき如何なる金儲教育を受けるのが一番よいか、といふやうな問題を、眞面目に研究した人は十人に一人もない始末です。

ちよつと考へてみても分る通り、多くの大人は、金儲を賢く使ふ方法を識つてゐません。金儲を安全に持つてゐる方法や、有効に融通する方法を識つてゐる者に至つては尙のこと少いのです。私共はほんとに、下らなくお金を使ふ人々を毎日見ます。また、自分の持つてゐるお金が若しや失くなりはいしないかと毎日心配してゐる人もあります。さうかと思ふと、一儲けするつもりで投資して、その結果は一文にもならないで終る人もあります。

慈善事業をやつてゐる人は特によく御存じでせうが、貧乏人といふものは、

折角施された僅かばかりのお金を、實に下らなく使つてしまふものです。或る貧困な家庭の女の如きは、貰つたお金を全部投げ出して蟹の糞詰を買つて食べました。また或る女の如きは、矢張り其の日暮しの者でありながら、遇ふ施されたお金で、寫眞を撮りました。

富豪の息子や娘となると、父親の儲けてくれた金を、屢々貧乏人よりも猶ほ馬鹿らしいことに使ひ捨てるものです。概して、貯金と消費の経験を多く有つてゐるものは中流階級ばかりです。中流階級の人々は金儲を賢く使ひます。そして彼等の多くは、知識を獲ることに多額のお金をかけて居ります。もしも充分氣を付けて金儲教育が計畫されるならば、世間の人達は皆な賢く金を使つて、そしてどん／＼金を殖して行くやうになるに違ひありません。

## 毎日に金錢は大切になる

金錢教育の必要は多くなるばかりです。文明の進歩するに従つて、金錢は生活に缺くべからざるものとなつてきます。金錢さへあれば、食物とか薪炭とか衣服とかいふ必需品を何時でも手に入れることが出来ます。金錢さへあれば、自分の好きな風景を見ることが出来るし、自分の身に適した氣候のところになることも出来ます。金錢さへあれば、自分の身の周圍に多くの藝術品や文學書を並べ、そして其等を充分に味はつてゐる餘裕を持つことも出来ます。金錢さへあれば、どんな娛樂でも勝手にやる事が出来ます。それよりも第一に我々は、金錢さへあれば、思ふまゝにお客をすることが出来るのです。

儲ける方面から考へてもさうです。職人にとつては、凡ての産業は、單に金

錢を得る手段に過ぎません。ずつと太古に於ては、誰れでも、自分の欲するものは自分の手で直接に作らなければなりません。即ち、自分で自分の食物を探し、自分で自分の家を建てる、自分の氣に入つたところに勝手に引き移る、そして自分の好きな、または自分が左右することの出来る人々の間に住むといふ風でありました。

ところが現在ではさうではありません。人々の努力は、金錢を得ようとするところにあります。そして、其の金錢で以て、自分の最も望む満足を得るので、多くの場合、新鮮な空氣も、日光も、溫暖も、娛樂も、知識も、權力も、單に金錢さへあれば、自分のものとする事が出来るのです。たしかに、人生の最上のもの——例へば、愛とか友情とか名譽とかいふもの——は、金錢で買ふことが出来ません。しかし其れと同時に、金錢がなくては、自分の友達になつて

貰ひたいと思ふ人や愛人になつて貰ひたいと思ふ人と交際ふことが、殆んど、または全然、出来ないのです。それでありますから、是等のことも、幾分、金錢がなければ出来ない相談です。

社會的見地から此の事を考へてみてもさうです。政治上の、宗教上の、社會上の、修養上の、休養上の、または教育上の、ありとあらゆる組織は、凡て金錢で支へられなければなりません。道路とか燈火とか水とか郵便とかいふやうな、生活上の便益も、凡て金錢をかけて初めて得られるのです。それであるから其の金錢は、是等の便益に浴する人々から、税金として、または寄附金として集められなければならないのです。凡ての市民は、公共の警備や便益の施設事業に關係してゐるのですが、唯だ其の中で、財政上のことを幾らか識つてゐる人々のみが、この施設事業を賢く判斷することが出来るのです。しかし市民

たるものは誰れでも、租税が不正に課せられることのないやうに、そして金錢が下らなく費されることのないやうに、即ち、富豪を助けて貧乏人を困らせる方に費されることのないやうに、常によく注意してゐなければなりません。

私共の仕事も、娯樂も、修養も、または社會生活をするための好機會も、現在では大部分私共の財政状態に左右されるものである以上は、金錢問題を解決する訓練を少しも受けてゐない者の如きは、まるで生活の準備を缺いてゐる者であると言はれなければなりません。それであるから、子供が、世間に出て、單に高價な經驗ばかりで金錢問題を解決するやうでは心細いから、彼等が世の中に出る前に、金錢教育を、何處で、如何にして施されたならよいかといふことを私共は、よく考へてみなければなりません。



子供は金錢の出入を見る機会が少い

亞米利加の都會や、或る田舎では、子供は、殊に富裕な家の子供は、金錢を使ふところを見るのが昔に較べて甚だ少ないのです。多くの家庭では、雜貨及其他の日用品や贅澤品を凡て電話で注文します。そして代價を拂ふときには小切手を用ゐます。それであるから、子供は代價を拂ふところを見る機会がありません。砂糖や電燈料が幾らなのかも知らないことが多いのです。多くの子供が實際に金錢を使ふところを見るのは、馬車の賃銀を拂ふときとか、活動寫真に入るときとか、またはお菓子を買ふとき位なものです。

もしも子供が、何處から金錢が湧いてくるのかを少しでも知つてゐるならば、まさか、金錢は銀行から貰つてくるものだといふやうな考へは持たなくなるで

せう。子供等は、どんな仕事をして金錢を儲けるのか一向知らないのです。金額には何時も限りがあるものだといふことも知らないのです。甲のものを買へば、乙のものは買へなくなるといふことも知らないのです。或る親は金錢のことは殆んど言はない。そこで子供は、金錢と云ふものは生活の上に如何な役目を演ずるものか、ちつとも知らないのです。

また或る親は、金錢の問題を頻りに説いて、金錢といふものは要するに欲望を満足せしめるものだといふ觀念を子供に抱かせるのです。しかし口で言うて聞かせただけでは駄目です。子供といふものは、唯だ金錢の價値や使用を實際に觀察したり經驗したりすることによつてのみ、生活上の金錢の役目に就いて眞實の觀念を抱くことが出来るのです。金錢教育の問題は、大體、このやうな實際の觀察と經驗とをするに最も好い機會を、適當な時に、適當な方法で子

供に與へるのを本務といたします。

### 金銭の眞の役目は何か

亞米利加人は黄金萬能主義であるから、彼等に向つては餘り金銭の效能を説く必要がありません。しかし、いくら黄金萬能主義でも、「金そのものには何等の價値もない。唯だ物が買へるから價値があるのだ」といふことは承知してゐて貰ひたいものです。金銭は單に、或る種の欲望の満足と自分の勞力とを交換する便利な手段に過ぎません。それであるからこそ、金銭教育の問題が大切になるのです。この問題は、單に價値の單位によつて物の値段を計算したりすることではありません。

金銭問題は、數學の法則よりも更に深く、更に根本的なものです。この問題

には、我々は如何な生活を選ばなければならぬかといふことも含まれてゐます。それから、我々は如何な努力をやればよいのか、そして如何な欲望を満足せしめなければならぬか、といふことも矢張り金銭問題で解決されるのです。もし私共が少しの努力しかなかったら、極く僅かの欲望を満足させるだけのものしか得られません。もしまた私共が、餘りに多くの努力をし過ぎると、こんどは悦樂を得る時間も精力も無くなつてしまふでせう。もし私共が、金銭を得ると直ぐに使つてしまふと、満足が早く得られる代り、多くの場合、その満足は直ぐと消えてしまふものです。もしまた私共が金銭を貯めると、「俺は金銭を持つてゐるぞ」といふ考が常にあつて愉快であります。しかし其れと同時に、「折角貯めた金銭が若し失くなりはいしないか」といふ危惧も随分あります。しかも尙ほ其の貯金の大部分が他人のために使ひ盡されることになるかもしれ

ないのです。もしまた私共が、「金錢があれだけになつたら、あれに使はう」といふ計畫を以てお金を貯めると、私共は、使ふときのことを豫想する楽しみも得られるし、また實際に使ふときの楽しみも味はふことが出来ます。しかし、此處で私共が豫想したり實現したりするやうな種類の満足は、私共の欲望や理想とは甚しく異つたものです。諸君が何んのために貯金するか、そして何に使ふか、といふことが私に分れば、私は其れによつて諸君の人物及び志望を知ることが出来るのです。

### 金錢教育は單なる「金錢」の問題ではない

金錢の道德的意味を忘れてはなりません。財産を持つてゐる人は、持つてゐない人よりも一般に責任が重く、そして、財産の權利をも、よく辨へて居るも

のです。社會に働いてゐる人にはよく知られてゐる眞理だが、極めて貧乏な者は、金を儲けようとして努力を進めて行き、そして有用な品を買ふものです。このことは道德的改良の最もよい徴候に數へられてもよいのです。富豪の方はどうかといふに、金持の連中は、いかにして金を儲けるか、いかなる風に金を使ふか、といふことには全く無頓着ですが、これは明らかに道德的墮落であります。大多數の犯罪は、相當の努力を拂はずに濡手で粟の掴み取り式に金を得ようとするところに生ずるものです。

そこで子供が、或る努力を盡した其の報酬として若干の金錢を得、そして此の金錢を仲媒として更に或る満足を購ふといふ風になつてきた場合には、最早子供の金錢教育の問題は單に狭い意味の「金錢」上の訓練ではなくなつて、實際上の、社會上の、哲學上の、及び道德上の訓練となるのであります。金錢を

儲けたり費つたりする度毎に、子供は、生活の最も重要な問題に直接にぶつかるのであります。金銭を儲けたり費つたりするには、どんな努力をすればよいか、どんな方法を選んだがよいか、といふことが適當に訓練されて居れば、子供は未來に於ては必ず成功し、そして益々社會上有益な人間となるのであります。

### 金銭教育は實際を重んずる

私共は子供に金銭教育を授ける必要を充分呑み込みました。しかし其れだからといって、家庭または學校で一定の教訓を子供に授けなければならぬといふ理窟はないのです。反對に、金銭に關して、寧ろ随意に教へた方がよいやうです。金を實際に儲けたり費つたりする經驗をさせることが眞の金銭教育の土

臺であります。子供に金銭のことを口で話して聞かせても勿論子供の教育にはなりません。しかしそれは單に、子供が實際に經驗したり、明確と想像に描き出すことの出来るものを理解する、其の補助となるだけのことです。即ち、金銭教育の問題は、金銭に關して訓練された經驗をする好機會を子供に與へるところのものであります。

## 第二章 金銭の觀念の發達

### 子供は金銭を如何なるものだと思つてゐるか

子供が二歳にもなつて、誰か金銭を受取つてゐるのを見るといふと、早速それを眞似る心と好奇心とに誘はれて手を差し出します。そして何かをねだ

るのです。もしも其の時、銀貨を一枚與へますと、子供は暫くの間、それを手遊びにしてゐます。それが光つてゐる銀貨ですと尙更です。二年と五六ヶ月経つた子供ですと、誰か懐中から手帳を取出すのを見さへすれば、強情にいつこく金貨をねだります。これほどの程度にゐる間は、未だ金貨の價値を辨へてゐないのです。唯だ、金貨といふものは大人の欲しがるもので、そして自分等の手遊びするにいつものだ位に思つて居ります。

四五歳になると、いろんなことを見たり、聽いたり、経験したりするから、金貨の觀念が發達してきて、金貨といふものは手遊びにするものではない、もつと役に立つものだといふことが分つてくるのであります。子供は、金貨で色んなものが得られるのを見るのです。多分その年頃の子供は、お金を五錢渡されて、何か美味しいものを買つてこいと言ひつけられるともあるでせう。この

やうな経験は、子供の生活に殆んど一時期を劃するものです。子供は最早貨幣を玩具と見るやうなことはしなくなります。寧ろ、金貨といふものは、何時でもどんなものにも變へることの出来る不思議な魔法の力を持ったものだと思へます。そして此のやうな考へから、あらゆる想像力の端緒が開かれるのです。最初は一錢出せば、どんなものがどれほどくるとか、または、いろいろの貨幣のそれぞれの價格とかに就いては、一向明確した觀念を持つてゐません。ただ、それでも、銅貨を出すよりも銀貨を出した方が、餘計お菓子があるといふことは分つてゐます。このやうな状態から發達して、間もなく子供は、勘定することを感じたり、兩替することろを見たりして、やがて、二十錢銀貨、十錢銀貨、一錢銅貨等のそれぞれの價格に就いて明白した觀念を抱くやうになるのです。子供はまた、しばしば、或るものを買ふのに金貨が足りなかつたやうな

場合にも出くわします。そして、だんだんと、いろいろな品物のそれぞれの値段を覚えるのです。しかし、五圓十圓といふやうな大金で買ふ品物に就いては、子供は長い間あやふやな觀念を抱いて居ります。それだから子供は、五圓出せば、馬でも自動車でもお菓子でも玩具でも、なんでも買へるつもりであるのです。

子供は、百まで數へるやうになるまでは、未だ百は十よりも多いといふことを知つてゐるだけです。この場合、子供にとつては、百は最大の數です。しかし其後次第に千、萬といふやうな大きな數のあることを知つてきます。子供は「數」または「金」を、或る非物質的なもの、大いなることを形容するに用ゐます。例へば愛情の大いなることを形容する場合、亞米利加の子供は「わたしは百ほど貴方を愛する、または「わたしは百圓ほど貴方を愛する」と云ひます。

日本の子供が「あたしと一緒に行くなら、百圓あげる」と云つたりするのなども同様の心理でせう、しかし子供は此の場合、「百」といふ一定の數の觀念から斯う言つたのではなく、寧ろ單に「非常に」と云ふ代りに「百」といふ大きな數を持つてきたに過ぎません。子供は、十圓、百圓、千圓といふやうな大きな數に對しては、唯だ漠然とした觀念しか持つてゐないときでも、一錢、五錢といふやうな小さな金銭で買へるものには特別に明瞭した觀念を持つてゐるものです。

次に擧げる代表的な例によつて、金銭に對する子供の最初の觀念を窺ふことが出来ます。

『金銭のこと、または金銭を使ったことの一番最初の記憶は、お母さんのところへ走つて行つて、お菓子を買ふお金を一錢ねだつたことです。私は其の時分

銅貨や銀貨は、或る自分等の知らない方法で、此の世に持つて來られ、そしてお菓子とか人形とか、その他の同じやうに美しい面白いものを買ふのに使ふものだと思つてゐました。」

「私は幼い時分は金錢のことを餘り考へませんでした。私が年上の人達と何處かへ行きますと、その人達はきつと私に何か買つてくれました。そこで、時の經つに従つて、私は、お金といふものは大人の持つべきものだ、僕も何時か大人にするやうにお金を費つてみたいものだ、と考へるやうになりました。」

「金錢に對する私の最初の觀念は斯うでした。お金といふものは物を買ふためのもので、そして何處でも欲しいと思へば何時でも貰へるものだ。」

「私は極く小さな時分、左様四歳ぐらゐの時分でしたらう。十錢銀貨よりも五錢白銅の方が大きかつたものですから、私は五錢白銅の方を欲しがつたのを覺

えて居ります。私は五錢白銅の方が十錢銀貨よりも價格が上だと思つてゐたんですね。それから、私は、五錢白銅一枚貰ふよりも一錢銅貨五枚貰ふの喜びました。やつぱり餘計數のある方が餘計ものが買へると思つてゐたんですね。次に擧げる二つの例によつて、數や價格に關する子供の心理狀態に對していかに大人が無頓着であるか分るであります。

「私の四歳の誕生日のときでした。お父様が、好きなものを何んでも買へと言つて、私に傲然と甘錢くれました。私は嬉しくつて夢中になりました。そして喜び勇んで兄のところへ駈けて行つて其の寶物を見せびらかしました。ところが兄は懷中に手を突つ込んで、銀光輝く十錢銀貨を五枚取り出して私に見せました。私の甘錢銀貨な薄黒く汚れてゐました。そこで私は直ぐさま此の汚い甘錢銀貨一枚と美しい十錢銀貨一枚と交換しました。私はお父様のところへ行

つて其の十錢銀貨を見せました。しかし此の交換で損したことが分つたので、私は非常に失望しました。これが、汚い銀貨と美しい銀貨とを取り換へた最後の經驗です。』

『私の三歳の誕生日のときでした。祖父が私に贈物として十圓金貨を一枚下さいました。その金貨は高いところにある私の貯金箱に納められました。ところが私はお母様がうっかり向ふを見てゐる間に、そつと椅子の上に乗つて、貯金箱から其の金貨を抜き取りました。それから私は扉口から飛び出して、お母様が周圍を見廻してゐるうちに、街路へ出てしまひました。恰度或る雜貨店の店先に差しかつたとき、私はお母様が泣きながら後から追つかけてくるのを見ました。私に追ひついたとき、お母様は、手に持つてゐるものを見せると私に申しました。私は、たつた五錢持つてお菓子を買ひに行くのだと直ぐ答へまし

た。私は矢つ張り五錢銅貨と同じものゝつもりで金貨を持ち出したのでした。申すまでもなく私は其の金貨を取り上げられて、その代り五錢だけのお菓子を貰つたのです。』

### 子供は何故貯金を喜ぶぬか

金錢といふものは、現在の欲望を満足させると同時に、未來の欲望をも満足させるものだといふ考へを抱かせるまでには中々手數がかかります。或る子供の如きは、いま直ぐに欲しいものが出てこないうちは、金錢のことなどは、いんで考へないのです。或る子供のごときは、四歳になつても、十錢銀貨を欲しがりませんでした。なぜといふに、その子の欲しがるものは一個五錢だつたからです。そして、その子には、十錢出してそれを二個買ふ心は起らなかつたの



です。現在は格別欲しいものではなくても、何時かは買はなければならなくなるものがあるといふことが理窟の上で分つてきても、子供は其んなことに餘り頓着しません。子供は場合によつては、一寸との間貯金をします。しかし或る一定のものを買ふといふ目的があつて貯金するのではありませんから、未來に於て必ず使はなければならぬことを豫想して今から金銭を貯めて置くといふやうな努力は少しもしないのです。また、以前には少しも考へたことのない品物を、いま欲しくなる場合に屢々出合ふものですが、それでも尙ほ矢張り現在のことばかり考へて、未來に使ふ金銭を得ようといふ努力はしたがないのです。

未來の必要を比較的に等閑にする傾向は子供には當然のことであるが、しかし此の傾向は或る人には一生付き纏ふことがあるものです。勿論このやうな人は矢張り、主として現在の目的のためにはかり金を使つて、いま要するよりも以上の金を儲けようとする努力を缺くのです。彼等はまた、まさかの時の用意のために現在の欲望を節するといふ心も起さないのです。

未來といふものを何時も順調なものゝやうに考へてゐる人々もあります。彼等は、困つたときの用意に貯へるといふことを何時もけなしてゐます。さもなくば、その金で何時か面白く遊んでやらうといふ下心で貯金に精を出すのです。現在の欲望と未來の必要と、その何れが大きな影響を現はすかといふことを論定するには、經驗から教へられるところのものを以てしなければなりません。しかし此の兩者の關係には本來の相異があります。それは恰度、賭博を好む本能の力と、機會を掴まうとする傾向との間に本來の相異があるのと同じです。賭博をしたがるのは、即ち現在の欲望を今直ぐ充たさうとする心の一つです。

機會を掴まうとするのは、現在の欲望を殺しても、未來に於てよい成功を得ようとする心の一つであります。

### 金銭そのものに價值があるのではない

金銭の價值に關する考へが至つて狭いものになつてゐる場合が間々あります。それであるから、大人は、金銭そのものに價值があるやうに考へて、金銭といふものは單に欲望を満足させる手段として價值のあるものだといふことを忘れてゐるのです。そこで、唯だ出来るだけ澤山の金銭を儲けて、それを貯め込まうといふ考へで一生懸命働くのであつて、その儲けた金銭で何を買はうかといふ計畫はちつとも立てないのです。このやうな連中は、唯だ金を貯めたといふ心で一杯ですけれども、その金銭で以て欲望の満足を得ようといふ氣

は少しもありません。そして、此のやうな大人の行爲や言語が屢々子供の頭に、「金といふものは金自身で價值あるものだ」といふ考へを植ゑつけて、その結果は、小さな子供までも、貰つた金銭を皆んな貯めようとするやうになるのです。

### 大人でさへも金銭の眞の價值を知らぬ者がある

金銭の使用に關しては子供の考へが非常に發達して來ましても、金銭の價值に關しては未だ明白した考へが出てこないものです。四歳ぐらゐになると、多くの子供は、いろんな品物が一體「どこから來るのだらう？」といふ質問をしますやうになります。此の質問に對して「それは金銭を出して持つてきて貰ふのだ」といふ答へが得られますと、子供は臆ろげながらも、如何すれば金銭を儲け

るにいゝかといふことが分つてきます。それよりも更に進んだ考へは、仕事を  
して貰つた人にお金を拂ふところを見たり、或は、一家の人々の各々儲けるお  
金のことを傍で聞いてゐたりして、初めて子供の頭に生ずるのです。子供は自  
分の使ふ金銭を親から貰つてゐる間は、未だ實際に金銭の価値を知ることが出  
来ません。唯だ實際に金銭を儲ける経験をしてみ、初めて、これだけの金を  
儲けるには是れだけの努力をしなければならぬといふことが分つてくるので  
す。

金銭は、屢々「価値の測定」であると考へられてゐます。このやうな考へは、  
金銭の価値と使用とに關する考へが充分發達してこなければ、解るものではあ  
りません。頭のいゝ大人でも、「金銭そのものに価値があるのではなく、金銭を  
以て品物の価値を測つて、十銭の品物は十銭の銀貨で買へるから金銭といふも

のは有難い便利なものだ」といふことが分らずにゐるものがあります。

金銭は、努力に相應して得られるもので、努力が多くなれば金銭も多く入り、  
従つて欲望の満足も多いわけでありませぬ。しかし此の考へを實際に主張するの  
は中々困難であつて、多くの人は、政府といふものは唯だ單に金を儲けること  
そのことを貴しとしてゐるのだと思つてゐます。そこで、大多数の人は、相當  
の努力を拂はずに金の儲かる工夫をしようとしてゐるのです。言ひ換へれば、  
彼等は濡れ手で粟の掴み取りをやらうとしてゐるのです。しかも、それが出來  
るといふ信念が人々の心の中に潜んでゐるからこそ、一攫千金の夢を見て、ま  
んまと上手な投機師の手に引つかつて、莫大な金を煙にされてしまふやうな  
ことも起るのです。

以上の理由であるからして、子供に早くから金銭教育を施して「金銭といふ

ものは働かなければ得られないもので、そして欲望を満たす手段として價值があるのだ」といふ考へを、いつかりと明白に養ふやうに訓練しなければならぬのです。

アメリカ合衆國アイオウワ州のスウ市で、三歳から八歳までの子供三千七百人に「金錢とは何んです」と尋ねました。すると、その中の九十七パーセントは、はつきりした答へをしました。三歳程度の子供は、主に、金だとか紙だとかといふやうに、金錢の質や外觀を述べましたが、八歳程度の子供になると、「金錢は品物と取り換へるもので、そして品物の價值を測るものだ」と答へたものが卅四人ありました。中には、「大切なものだ」とか、「丸いものだ」とか、「悪いことの源だ」とかいふやうな漠然とした答へも少しはありました。

子供の多数は、金錢の價值に關して定つた考へを少しも持つてゐないといふ

ことは、次に擧げる事實によつても分ります。

「十圓あつたら、あなた方は何に使ひますか」と斯う子供に尋ねてみました。子供の答へは斯うでした。

「牛を買ひます」

「從兄弟と、お母様と、お父様と、兄さんとへ、贈物を買つてあげます。そして私の分には、靴と靴下と襟飾とカラーとカフスと、それから學校へ上げる美しい絹の旗を買ひます。」

「羊二匹、豚一匹、印度小馬一匹、買ひます。」

是等の答へによれば、スウ市の子供の五十パーセントは、三歳にならぬうちに、半分は五歳にならぬうちに、十分の九は十歳にならぬうちに、既に「金錢が要る」といふことを充分知つてゐたのです。

## 第三章 平常の金銭教育

## あやふやな金銭教育は子供を誤る

金銭問題に就いて如何な訓練を受けたかといふことを、師範学校の生徒と大學の學生とに聞いてみました。その結果によると、大方の親達は、金銭の處理を唯だ偶然に教へてゐるに過ぎない。組織的な計畫を立て、それによつて、子供の金銭教育を自分の考へ通りにやつてみた親は、ほんの僅かでありました。大概は、金銭教育の成績をあげようといふ考へなどは少しもなく、唯だ思ひついたときの臨機應變に任せてゐるのです。それでも、多くの親達は、流石に、子供に貯金をすすめることだけは忘れてゐません。そして、まさか、その子供

に、金銭の馬鹿消費を許すやうな親はないだらうと思ひます。

或る若い男が申しました。

「私は子供の時分、一定のお金を貰ふやうなことはありませんでした。私は極く僅かばかり貰つて、極く僅かばかり使ひました。私の要るものは何んでも、自家で調べてくれたのです。私の家庭では、各自にお金を持つてゐる必要は餘りなかつたのです。私が金銭を幾らか儲けたのは、十五歳になつてからです。」

或る若い婦人が申しました。

「妾は一定のお金を頂くことはありませんでした。六歳から十二歳までは、お母様とも、他の叔母様とも、遊びに出かけるやうなことはなかつたもんです。それから、お金を費ふ機会が殆んどなかつたのです。それですから、たまたま、お菓子を買ふのに、ほんの一銭か二銭要るだけでした。」

「それから、十二歳から十八歳までは、お父様が二三日おきにお金を下さいます。妾はそれで電車賃を拂つたり、アイスクリームを食べたり、活動寫眞を觀たりしました。必要なことに費ふお金は、いつもお父様かお母様か、拂つて下さいました。そんなとき妾は何時にも、何に其のお金を費ふのかを説明するのでした。殊に學校の演奏會や運動會に費ふお金は、必ずその費ひ途を説明したものです。それといふのも、妾が十人の娘と一緒に或る大きな町へ修業に行くときの用意に、お父様は決して餘計なお金を費はせまいとしてゐたからです。」  
次に擧げた例は、それよりも更に特色のある親の心づかひです。

「子供の時分、私は一定のお金を貰つてはゐませんでした。時々、お金を儲ける機會がありました。時々私はお金を貰ひました。私は自分に最も有用なものだと思つたものなら何んにでも其のお金を使つていゝ特權を持つてゐたんです。

けれども、しかし、そのお金を、下らなく、即ち無用なことに使ふことは許されてゐませんでした。」

他の多くの例に於けるがごとく、此の例に於ても、親の心づかひの中心點は、「金錢を下らなく費つてはならない」といふことです。

「私は親からお金を貰ひました。親は、私が『下さい』と云はなくてもお金を呉れることがありました。大概は、私にねだつて貰ふのでした。私は、自分で勝手にお金を費ふことは許されてゐませんでした。十二歳から十八歳までは、家庭の臺所仕事などをして、小遣錢を貰つてゐました。その頃は自分のお金を使ふの前に、自由でした。そして私は何時も本を買つたり、實際に入用なものを買つたりしました。それですから親達にも、私がお金を下らなく費ひはしないといふことが分つたのです。」

## 道徳的に金を使はせる親もある

慈善が奨励される場合もあります。それは明らかに道徳的訓練を興へようとする考へから出たものです。一例を挙げますと――

「私は、一定のお金を貰つてはゐませんでした。時々、走り使ひをしたり、いやな仕事を頼まれたりして、お金を儲けました。そのお金を自分の好きなことに使ふのを禁じられてゐたわけではありませんけれども、しかし私は、お金をなるべく慈善のために使ふやうにすゝめられてゐました。大概私は其のお金を日曜学校の献金にしました。」

金銭に關する道徳的訓練は、他に何んにも注意を喚ぶものゝない場合に授けられることが多いのです。

「家庭で受けた私の金銭教育は至つて狭いものでした。私はお金を持つてゐたときには使ひました。持つてゐない時には、持たないまゝでした。けれども、常に賢く正直でなければならぬと言はれてはゐました。そして借金することは決して許されませんでした。」

次ぎに擧げる實例に於ては、明らかにお母様が教育の方針を立てゝゐます。そして其の方針は成功してゐるやうに思はれます。

「私が初めて學校の教師になつたとき、毎月の俸給は全部お母様にあづけて、私は要るだけのお金をお母様から貰ふことにしてゐました。その後ち、お母様の主張に従つて、私は賄料をお母様に拂つて、そして自分で自分の會計をやることにいたしました。かうしたお蔭で、私は最もよい金銭上の經驗を得たわけです。それまでは、毎月どれほどのお金を使ふのか、ちつとも頓着しなかつ

たのです。私は早速帳簿をつけ始めました。そして毎月の収入の幾分かづつを必ず貯金することに決めました。」

次ぎの實例に於ては、金銭の取扱ひや、後日に一定の金額を立派に管理する下準備に必要な経験を、子供に與へるために、或る金額を其の子の自由に費はせて居ります。

「六歳から十二歳までは、私は、定つたお金を貰つてゐませんでしたし、お金を儲けることもありませんでした。私の親は、私に着物をこしらへてくれましたし、また私のことに要るお金は皆な出してくれました。農場に住んでゐたときは、都會の子供と異つて、偶然な其の場の都合で金銭を澤山使ふといふやうな機會には會ひませんでした。けれども、お金は、度々、父母や兄や姉から貰ひました。私は其のお金を貯めて置くやうにすゝめられることもありませんでした。」

直ぐに使つてしまはなければならぬこともありませんでした。何か買物にやられるときには、何時でも、充分なくらゐお金を渡されました。しかも品物の値段のことはちつとも考へませんでした。十二歳から十八歳までの間に、私は金銭上の経験を以前よりも多く得ました。それでも未だお金を儲けることは出来ませんでした。そして此の時の最初の二年間といふものは、私は矢張り一定のお金を貰つてはゐませんでした。けれども、私は、自分の着物は自分で擇んで、その勘定は自分の手から拂ふやうにしてゐました。唯だ一定のお金を貰つてゐないといふだけで、私の要るだけのお金は拂はれてゐたわけです。」

「十四歳で上の學校に入つてからは、毎月廿圓づつ貰ふことになりました。この金で私は先づ本や學校用具を買つて、それから其の殘金は、女學生の好くやうなものを買ふのに費はなければなりませんでしたが。但し餘り極端に走らない



程度で……。」

### 家庭の金銭問題を子供に聞かせる利益

一定の収入で暮らしてゐて、しかも、親が金銭のことを話してゐるのが、直ぐ子供の耳にも入るやうな家庭に育つ子供は、必ず何らかの金銭教育を受けるものです。

「私の金銭を取扱ふ智識は、家庭で、知らずくの間を得たのです。私の親は家庭の費用を支拂つてゐましたし、それから、建物會社の方にもお金を拂つてゐました。毎月幾らと定めてお金を支拂つてゐるのが、私の頭に深く刻み込まれたのです。けれども、私が最も偉きな智識を得たのは、お母様のやりかたからでした。私のお母様は必要なものばかり買つて、決して下らなくお金を使ふ

やうなことはありませんでした。そして大概の女の人の求める楽しみを、お母様は、見向きもしませんでした。お母様は決して無駄使ひをする人ではありませんでした。それからまたお母様は、安いものを澤山買ふよりも、よいものを一つ買ふといふ方でした。私が其の場の出来心で直ぐ物を買はずに、一週間も待つてみる習慣をつけたのも、お母様のお蔭です。かういふ場合、私は、その品物が實際に必要なのか、それとも、單に其の場の出来心で欲しくなつたのか、よく確めるのです。多くの場合、物を欲しがらる心も、しばらく待つてゐるうちに、消えてしまふものです。」

「私は家庭の事情をよく知つてゐましたから、無暗にお金をねだることはしませんでした。そして、もしお金を貰はなくてはならないときには、果して貰つてよいか如何か、よく考へ、それから、お米を買ふお金を私のお小遣にするや

うなことはないか如何か、よく確かめて、その上でお金を下さいと云ふのでした。私は自分の貰つたお金は何に使つてもよいのでした。私の家庭では、金銭に關したことでは何んの秘密もなかつたのです。それでありますから親達も、私が決して下らないことにお金を使はないといふことを信じてゐたのです。全く私はお金を極く必要なことに使つたのです。たゞ私は極く稀れにお菓子を買ひました。しかも極く僅かばかり買ふのでした。そして買つたお菓子は妹や兄弟に分けてやりました。私が極く有益な金銭上の經驗を得たのは、家が貧乏だつたお蔭です。私は、いろんな點で用心して儉約することを覺えました。それは殆んど吝嗇に近いほどでした。けれども私は其れを決して恨みません。」

貧乏であるといふことが、反つてよい教訓になる場合もあるのです。財政の餘り裕かでない家庭では、子供が家庭の金銭問題をよく知つてゐるものです。

そして親達の話すことを聞いたり、することを見たりしてゐるうちに、いつともなく、驚くべきほど價値のある金銭教育を受けるのです。

「私の親達は、何か品物を買つてくれるたびに、その品物の子供達に見せて、それを買つたときの話を聞かせるのでした。この品物が何故買つてよくつて、あの品物は何故買つてはいけなにか、といふことを親達はよく話したものです。それから親達は、よい仕入品の特色だの、農場の仕入品の引き合はない理由だのを、よく私達に教へてくれたものです。」

他の者が申しました。

「幼い時分、私は家庭の金銭問題を知るによかつたのです。間もなく私は、故私の儲けた金銭を貯めなければならぬか、分りかけてきました。私は、居心地のよい家庭や、馬や、豚や羊などを有つてゐる人々と、そんなものを有つ

てゐない社會の人々を較べて考へることが出来ました。もし何か取引でもするやうなときには、私の家庭では、よい悪いの問題が論ぜられるのでしたが、私は何時もその場に居合はせるのでした。かうして、私は、品物をよく見分ける事も教はり、金銭をよく取扱ふ方法も分つたのです。」

子供には子供の財産を持たせるがよい

次に擧げる實例によれば、父の行爲が子供に如何ほど重大な影響をするものか、よく分ります。父親は此のやうな結果を暗に望んでゐたのでせうか、ゐなかつたのでせうか。

「十三歳のとき、私は豚を一匹貰ひました。そして其れを自分の好きなやうにしろと言はれました。私が其の豚で始めた仕事は、是れまでに類のない経験で

した。三年の間に、此の豚が随分蕃殖しました。そこで私は其れを賣つて、こんどは牛と犢を買ひました。子供の考へでは、此の後もどんどと蕃殖するものだと思つてゐました。その後には私は小遣錢に不自由することはありませんでした。懸引はお父様がやつてくれたので、私は町へ金をこしらへに行かなくてもよかつたのです。農村に残つてゐる澤山の子供は、みな自分達のためになる仕事をしてゐなければなりません。つまり『自分のものだ』と言ふによい財産を持つてゐなければなりません。このやうに、何かしら自分のものを持つてゐるといふことは、なんとなく金に豊かなやうな氣をさせるものでした。そしてまた、もつとよい仕事をやらうといふ氣を起こさせ、その上、自分の周圍によい仲間をこさへるものです。」

これと同じやうな實例があります。

「私は馬一匹と、羊や犢や豚を數匹と、それから僅かばかりの耕地とを貰ひました。私はこれ等の家畜を育てたり賣つたり、土地を耕したり、其處に出來た作物を市場へ持つて行つたりして、お金の價値を少し覺えました。これが私の是れまで受けた金銭教育のうちで一番よいものだつたと思ひます。」

も一つの實例によると、それまで金銭問題を少しも考へたことのない十歳の子供が、紙を賣つて一定の金銭を得るやうになつてからは、まるつきり考へが變つてきたといふことです。

### 子供にお金の使ひ方を教へる親は殆んどない

或る一定の計畫を立てた事實を舉げます。

「子供の時分、私は定つてお金を貰ふといふことはありませんでした。私は、

近所の人達に頼まれて、お使ひに行つたり、薪を運んだり、お掃除をしたり、お洗濯をしたりして、お金を貰ひました。これと同じやうな仕事は義務として家庭でもやりましたが、これは無報酬です。私の儲けたお金は何んに使つても構ひませんでした。私は有益なことに使ふやうにすゝめられました。私は四五週間分を貯めて置かなければ玩具が買へませんでした。私の儲けるお金は極く僅かで、それに仕事も度々あるわけではなかつたのですから、私は用心してなるべく費はないやうにしてゐました。そのお金を幾錢か出して安いお菓子を少しばかり買ふこともありましたが、自分で儲けて自分で使つてゐたお蔭で、私はお金の有難味を覺えたのです。十二歳のとき町から田舎へ引越して、その上、家が貧しかつたものですから、私は、「すべての子供は自分で働いて家計を助けなければならぬ」といふことを感じました。」

多くの實例によると、親達は、自分達がお金をよく使ふことは考へても、子供にお金の使ひ方を教へようといふことは、割合に考へないやうです。

「私がお金を貰つた経験は何時も同じです。最初から、私はお金をねだるやうに仕込まれたのです。尤も使ふのは何時も僅かでした。私は貯めるためのお金を貰つたことはありません。私は特別のことでお金を貰つた覚えもありません。いつも使ひ途をよく話してから貰ふのでした。親が呉れてもよいと考へれば、私はねだつたゞけのお金が貰へたのです。」

次ぎの實例のやうに、一定の方針を立て、みても、直ぐ止めてしまふのがあります。

「六歳から十二歳まで、私は要るだけのお金を親にねだるのが常習でした。十二歳以後は、一週間毎に幾らかづつ貰ふことになりました。私は此の新しい方

法をいやがりました。そこで此の方法は直き廢されて、もとの通り、ねだつたときに貰ふことになりました。」

### 一定の金額を子供に持たせてみるがよい

子供がよい金銭教育を受けるに都合のよい境遇にゐると大變幸福です。それは次ぎの實例をみても分ります。

「私が幼い時分お金を貰つたことを想ひ出してみますと、先づ家の中へ駆け込んで、お母様にお菓子を買ふお金をねだるのです。さもなくば、飴屋の觸聲を聞きつけてお金をねだるのです。しかし最初のうちは貰ふお金も極く僅かでした。その後ち、私は、お使ひに頼まれたり、近所の嬰兒のお守をしたりして、その時々に従つて、十銭か廿銭貰ふやうになりました。更に其の後ち、十歳ぐ

らゐの時だつたでせう、お母様が一週間毎に幾らかづつ定めてお金を下さることにになりました。そのお金は私の好きなことに使つてよかつたので、使ひ途を聞かれるやうなことはありませんでした。十二歳のとき、私の家は田舎の農場に引つ越しました。田舎へ移つたお蔭で、農場のお手傳ひをしてお金を貰ふといふやうな新しい金儲けの経験をいたしました。それと共に、私は自分で小さな畑を耕して、其處に代價無しで持つてきた種子を蒔いたりしました。そして出來た作物は市場へ持つて行つて賣りました。私はもうお母様からお金を貰はなくてもよくなりました。第一の夏に、櫻の樹に生つた果實を勘定してみたら、凡そ廿圓ばかりありました。先づ、私より澤山収入のあつた人と較べてみて、その人がどんな風に儲けたお金を使ふのか聞いてみることに。第二には、儲けたお金を勝手に使はないこと。兩方ともよい方法だと思ひます。學校教師になつ

て俸給を貰ふやうになつてからは、師範學校に入らうといふ望みを起し始めました。私は今更ながらお金の有難味が分りました。そこで先づ一定のお金で全部の拂ひをすますやうにして、大部分のお金は、師範學校の學費にあてることにしたのです。」

次ぎの實例には、大變よい金銭教育が示されて居ります。

「極く幼い時分、五六歳の頃だつたでせう。私は定つたお金を貰つてゐませんでしたが、何か下らないものが欲しくなればお金をねだつたものです。時々はお使ひを頼まれて幾らかお金を貰つたこともあつたやうです。おとなしくしてゐたお褒美に貰つたこともあつたやうです。少し大きくなつて、十四の年に私は上の學校に入りました。そのとき毎週定まつてお金を貰ふことになりました。そのほかに時々、一時間ぐらゐ子供のお守をしたり、事業をしてゐる兄の手紙の

宛名を書いたり、圖書館の本の館外貸出しや返送を手傳つたりして、お金を儲けてゐました。私はそれだけの収入で大變満足して居りました。初めて纏つたお金を儲けたときは今でも覚えて居ります。それは兄が永年つとめてゐる圖書館の仕事を私も手傳ふことになつたときのことでした。そのとき私は十歳ぐらゐでした。毎土曜日、時としては水曜日に、館外借出人のところから貸出しの本を集めたり、其の人へ新しい本を持って行つたりするのが私の仕事でした。私は一冊につき四錢づつ貰ひました。そして一日に四五十錢は儲かりました。」

「女學校に居つた時分は校内貯蓄銀行の組織によることになつてゐましたが、私は一錢切手や三錢切手や五錢切手を買つて貯金帳に帖るのが關の山でした。時々、誕生日のお祝ひやなんかをやつた後には、五十錢切手を買ふこともあり

ました。またこんなことも覚えてゐます。——十三か十四のときでした。私は、日曜日には花を身につけて教會へ行くのが大好きになつて、冬には、そのために温室咲きの花を度々買つたものでした。毬や網飛の綱も、或る時代には、なくてはならぬものでした。そして随分これにはお金を使ひました。女學校を卒業する頃には、私は五月の初旬の間に子供を集めて「五月會」をやるのが大變好きでした。子供達のお母様は、大概仕事に忙しくて、紙の冠や兵隊帽や五月籠を子供にこしらへてやる暇がありませんでしたから、私がいんな造つてやりました。それから私は、度々、私よりも二つ三つ年長の兄と事業をやつたのを覚えてゐます。それは甘錢かそこいらを他人に借して、返済のときには二錢の利子をとることでした。」

「私は幼い時分から、自分の買物は自分でやるやうにしつけられてゐました。」

そのお蔭で、お金の智識やお金の使ひ方が進歩したのだと信じます。それからもつと成長くなつたとき、お母様は、私達（私の二人の姉妹と私）の一人に、一年間の賄料の見積書を下さることにになりました。私達は、賄料のことを考へたり、注文の品を考へたりしなければなりません。かうして今まで或る限られたお金で生計を立てゝきたのです。此の様な経験のお蔭で、私は大變經濟のことを覺えたのです。」

次に擧げる事實によつて、原因と結果に就いて興味深い問題を考へさせられます。この事實の中に出てくる若い娘は、或る限られたお金でやつて行く訓練を缺いてゐるから、この娘には貯金が出来ないのか、それとも、此の娘は天性お金を上手に使へないから、両親は此の娘に一定のお金を呉れないのか？ かし何れにしても、機會を見て金銭教育をやるやうにしなければならぬので

「六歳から十二歳まで、私はお金が欲しければ両親にねだるのでした。十二歳から十八歳までも矢張り大概はねだつて貰ふ方でした。勿論私は何時もあまり働きませんでしたから、貰ふお金も僅かでした。それでも思つたよりは多分に頂くのでした。それは、きつと、私が仕事に精を出すやうにと、皆んなが特別に餘計下すつたのだらうと思ひます。両親は、私がいくらお願ひしても、決して、定まつたお金を下さりませんでした。なせ両親が私に一定のお金を持たせて下さらなかつたのか、ちつとも分りませんでした。私は寧ろ自分でお金を儲けました。私はお金を貯めることは出来ませんでした。いくらお金を持つてゐても、同じことです。私は一錢でも貯めることが出来ませんでした。」

以上擧げた色々の實例によつても、金銭教育を受ける方法にも色々ある



ことが分ります。大部分は、両親の立てた一寸した方針で、ほんの偶然に、金銭問題に就いて教はるやうです。多くの例に徴してみると、これは止むを得ないことで、且つ有益なこともあります。しかし、もしも両親が、もつと確固した考へを以てやつたならば、金銭教育上の多くの缺陷も必ず消滅するであらうと思ひます。

#### 第四章 金銭上の喜びと悲しみ

##### 子供の欲望を尊重せよ

大人は、何に金を使へば一番楽しみが得られるかといふ判断に當惑する場合が中々多いものです。しかし其の代り、どんな風に金を使ふかといふことにか

けては、子供よりも大人の方がよく知つてゐると、大概の大人は信じてゐます。けれども、子供の欲望と大人の欲望とは大分異つてゐるのであるからして、大人の欲望を標準として子供に満足と與へようとする、とんだ誤を生ずることがあるのです。子供は、その時その場で欲しくなつたものを買ふために五錢白銅を投げ出すのであつて、たとへ其の楽しみが其の場限りのものであつても構はないのです。そして、その時の子供の得意さ加減は、大人になつて札びらをかざる場合にも優つて居り、且つ何時までも忘れないものです。子供といふものは、年をとつてからは見向きもなくなるやうな品物をよく買ふものですが、それでも其れを買つた時のやうな満足は、とても二度と経験されるものではないのです。

両親は、其の場限りの楽しみよりも、永續きのするものにお金を使つた方が

よいといふことを、経験で以て知つてゐます。しかしまた此の法則には例外があるといふことも承知しなければなりません。子供の小遣錢を取締る場合でも、大人の金錢を費ふ経験や感情から割出して子供にお金を使はせると、それは、子供にとつては、決して「金錢で満足を得る」といふ事にはならないのです。大人はまた、子供自身の快、不快の経験の價值または害毒を、常に見くびつてゐるのです。

「最も幼なかつた時分に、金錢に關して諸君の経験した、最も樂しかつたこと、最も不快だつたこと、最も有益だつたことを擧げて下さい。」といふ問ひを、師範學校の大勢の生徒に出してみました。此質問の答へを二つ三つ次ぎに擧げますが、この答案によつて、子供自身の立場から見た金錢の價值が眞實によく分るだらうと思ひます。

「私が金銭上の最初の経験をしたのは、四歳ぐらゐの時からでした。其頃叔父様と叔母様が私の家に訪ねてきました。叔父様は私に一圓札を一枚下さつて、私と同年輩の従兄弟に其れを半分分けてやれと被仰つたのです。私は一人になつたとき、錢を取出して其の札を二枚に切りました。かうすれば二人が一枚づつ分けることが出来ると思つたのです。私は早速飛んで出てお菓子屋に行きました。ところが、お菓子屋の亭主が一向私のお金を受け取らうとしないので、私は變に思ひました。叔父様は此の始末を聞いて私共に銀貨を下さいました。そして二枚に切られた札は叔父様がもと通りに繼ぎました。」

四歳の子供が札を二枚に切つたといふことよりも、大人が「札を半分分けてやれ」といふ意味を四歳の子供に解らせようとしたことの方が、よつほど滑稽であります。

「最も楽しかつた経験の一つは、私の十二歳の時でした。それまで私は一人で町へ買物に行くことを許されておませんでした。或日のこと、お母様がそれを許して下さつたのです。私は新しい五圓札を持って出かけました。なんだか大層な金満家になつたやうな気がしました。大きな店に入つたり、一人で馬車に乗つたり、下りたりするのが、非常に面白くて、珍らしくて、私は此のとき初めて金銭上の最も楽しい経験を味はつたのです。」

初めて世の中に出た青年でも、次ぎに擧げる實例の中の少女の場合以上に重大な経験は有つまいと思ひます。

「私は唯つた一度、金といふものを厭に思つたことがあります。それは私の着る着物を買ふために、銀行の貯金を出して使ふやうに命令つたときのことです。私は八歳ぐらゐでした。お母様は、お菓子よりも衣類にお金を費つた方が私の

ためになるといふことをお存じなものですから、どうしても着物を買ふやうに被仰るのです。私はお金を持つて、しぶく出て行きました。そしてそのとき私は、これが私の身に振りかゝつた一番いやな出来事だと考へました。」

或る子供は、自分のお金で自分の着物を買ふときには、大變嬉しがり、また得意がるものです。しかし、此の場合、着物を買ふといふことが子供の心から出たものでなければならぬので、他に欲しがるものゝあるのを止めさせて、無理に衣類を買はせるやうだと、子供は非常に其れを厭がるのです。

次ぎに擧げる實例は、「子供によいクリスマスを迎へさせたいと思ふならば、親は先づ、子供に稍々博愛的な楽しみをさせる機会を與へなければならぬ、といふことを教へて居ります。」

「金銭に關する私の最も有益な経験は、或る年のクリスマスの時でした。クリ

スマスには私は持つてゐるお金を皆んな費ひました。贈物には幾らほどお金をかけるにいつか、皆んなは何んなものを喜ぶだらうか、といふやうなことを色々と考へてゐると、自分がなんだか急に大人になつたやうな気がしました。そのとき私は十歳で、六人の弟の一番上の兄でしたから、一同のクリスマススマスの買入れの目録を作つたりするのが、大へん愉快でした。私共はクリスマススマスに際して、いつも自分達のお金を使つて色々のことをするので、先づ私共は考案したり勘定したりするやうな骨の折れる仕事をやらなければなりませんでしたが、それに少しは犠牲にもならなければならなかつたのですが、それでも大變面白可笑しいことが多かつたものです。

「こんなことをやつたお蔭で、私は一層お金に注意するやうにもなり、そしてお金を下らなく使ふことも少なくなつたのです。私の小遣錢は色々の方法で私の

手に入りました。例へば私の家は田舎だつたもんですから、私は夏の間は果物をとつて賣りました。祖父様は私共のやうな子供達を雇つて胡瓜をもぐお手傳ひをさせて、一籠に一杯もげば五錢下さるのでした。冬は、私は兄弟の手傳ひをして小屋に薪を運びました。走り使ひや其他の小さな用事も絶えずありました。両親も度々、私共にお金を下さいましたが、幾分足りないやうに思はれました。何時も、自分で儲けたお金でなければ、お金のやうな気がしませんでした。」

## 第五章 小遣錢に就いて

### お金を使ふ経験を積ませよ

子供は小遣錢を使ふことから、初めて金銭を使用することを覚えるものです。

子供は、小遣錢を、貰はなければ使ふことが出来ません。しかし子供が金錢の價値を知るのは、金錢を使つてみてからのことです。子供といふものは、幾年間かお金を使つてみて始めて、たとへ金錢の價値に就いては定まつた考へを抱かなくとも、自分の持つてゐるお金で、どうしたなら一番満足を充たすことが出来るかといふことを、充分覺えるものです。全く、子供がお金を儲けようといふ氣を起すのは、金錢使用の考へが發達してから後ちのことです。親達が生に金錢教育を施す場合には、何よりも先づ、金錢の使用に就いて、それから、そのお金で何を買へば一番よいかといふことに就いて、子供に正しい一定の考へを與へ、そして、その考へを發達させるやうにしなければなりません。金錢使用の方法を充分よく會得むには、子供は、自分で買つたり、他人の買ふのを見たりする經驗を積まなければなりません。子供にお金を使はせて置か

ないと、他人の買物の意味に注意もせず、またそれを理解もしないでせうと思ひます。

### 小遣錢は子供の自由に使はせるがよい

「子供がお金を懐口に使ふか、どうか」といふことに親達が煩さく干渉する必要は餘りありません。下らなくお金を使ふのを絶えず監視したり、絶対に禁じたりすれば、子供の馬鹿な金錢使用を其の場で直ちに止めさせることは出来まされども、子供の金錢教育の効力は大して上るものではありません。或る婦人は次ぎのやうな經驗談をしました。

「わたしのお母様は、わたしの兄とわたしに時々お金を下さいましたが、わたし共はそのお金は皆んな貯金して置かなければなりません。たゞ、ク

リスマスのときと、家の誰れかの誕生日の時だけは、自由にお金を使ふのを許されるのでした。このやうにわたしは常の日はお金を使ふことを許されてゐませんでした。どうせ自分のお金であつて、他人はそれを拒む権利がないといふ考へがありましたから、わたしは、お母様のお許しがなくてもお金を使ふやうになりました。そして、こつそりと皆んなへ買つてきたものを分けてやつたりしました。ところが悪いことは是れだけで止まりませんでした。わたしの兄は至つて吝嗇で、お金を餘り使ひませんでした。それだから、わたしの貯金よりも兄の貯金の方が何時も多いのです。しかしそれがお母様に分ると、わたしの無駄使ひを感づかれてしまひます。そこでわたしは兄の貯金の中から幾らか抜きとつて、わたしの貯金に加へるやうにしてゐました。お母様はお金のことには随分やかましいひとでしたけれども、このことには、ちつとも氣がつかれませんでした。

せんでした。」

この事實は、もしお金を使ふのを禁じた場合、あらゆる方面を厳しく監視してゐないと、意外の悪結果を來すといふことを教へるものであります。

自分の子供の不正直に困り抜いてゐる或るお母様が斯う言つてゐます。

「わたしは子供に、毎月、僅かばかりづつ——まあ一圓ぐらゐづつ——お金をやりませんが、わたしはそのお金を下らないことに使つたり、お菓子を買ふのに使つたりしないやうに言ひつけるのです。」

勿論、貰つたお金を勝手に使ふのを許されてゐる子供は、もしも餘分な欲望を起したり、母親の注意が行き届かなかつたりすると、時としては不正直になることもあるでせうが、しかし、自由にお金を使ふのを許さない場合には、猶更子供は不正直になるものです。

時々子供は自分自身で選んだり判断したりしなければいけません。さうすれば、子供は實際上の智識を得るのです。母親が、この買物が得で、あの買物が損だといふやうなことを子供に教へてやるのはよいことです。しかし時々子供は自分で一番よいと思ふものを自分で選ぶ自由を持つた方がよいのです。子供が下らない選り方をした場合にも、それが大へん教訓になるのです。何故と言ふに、このやうな損な選り方と、利益のある選り方とを比較してみるのには、子供にとつて非常によい金銭教育となるからです。他から言はれたり忠告されたりするのは、大して効果のあるものではありません。

お金でお菓子を買ふやうになつてきた子供は、自分自身の経験や友達との経験によつて、すぐに買物が上手になります。最上等の品でなくても、子供はどつさりくるお菓子を喜びます。學校へ行く子供は殆んど凡て、お小遣の大部分を

お菓子に費ふものです。學校の近所で、安い駄菓子を賣つてゐる店は、すべて、子供をお得意としてやつて行くものです。シカゴ市の貧乏人の子供は、毎週廿錢乃至五十錢づつをお菓子にばかり費します。かういふのは、子供の健康に餘りよくないばかりでなく、金銭教育の上でも結構ではありません。かういふ子供は、お金を貰ふとすぐ使つてしまふ癖がついてゐるばかりでなく、お菓子ならお菓子ばかりといふ風に極く狭い範圍にお金を使つてゐるのです。貰ふとすぐ其れでお菓子を買つてしまふやうな子供でも、訓練のしやうによつては、そのお金を一時仕舞つて置いて、やがて、いつまでも残るやうな玩具を買ふやうになります。即ち此處に於て子供は、金銭使用に就いて、新しい考へを持つやうになつたのです。

## いろいろにお金を使はせてみるがよい

よく注意して、子供に物を買ふ経験をいろいろさせてみるのは、金銭の使用法を教へる上に大へん効果があります。お金を使ふには色々な方法があるものだといふことを子供に悟らせるやうに親達が氣をつけてさへ居れば、いくら自由にお金をくれてもよいのです。しかし子供が自由にお金が貰へて、自分の欲しいものを何んでも買ふによいやうでもいけません。そのやうな子供も矢張り捌口な選り方をする事が出来ません。シカゴで次ぎのやうなことがありました。それは「こゝに千圓あつたら何に使ふか」といふ問ひを出したら、多くの貧乏人の子供の答へた千圓の金の使用法は、金持の子供の答へと同じであつたといふことです。

## 子供の奢りを防ぐにはどうすればよいか

好きなものは何んでも買へる身分は大へん結構なやうに思はれるけれども、しかし、多くの場合、そのやうな身分の者は懈怠で吝嗇です。それと反對に、常に足らぬ勝ちである者の方が、最も幸福です。最も活動的です。そして最も進歩します。「神聖な不足」といふものは、老人にも若い者にも必要です。

子供は貰ふお金で満足しないで、もつと澤山欲しがるやうになります。貧乏人の子供、殊に富裕な家の子供と一緒に遊んでゐる貧乏人の子供は、いつも自分の貰ふだけでは満足しません。こんな場合には、分不相應のお金を使はないやうに訓練しなければいけません。子供に持たせるお金の額を厳しく制限するのは、金銭教育上極めて必要なことです。しかし、家庭内に、または子供のお



友達の中に、誰か無暗にお金を使ふ人があつては、この制限は何んの役にも立ちません。

中流社會の場合では、子供の收入と支出とを程よくしようといふ問題は何時も困難です。子供が、無暗にお金を使ふお友達を持つてゐると、自分も澤山お金が使ひたくなります。子供同志がお互ひに、「誰れそれが澤山お金を使ふ」といふやうなことを話し合ふから、従つて自然子供の仲間に奢るのを喜ぶ傾向が高まるのです。そこで子供は親達にもつと、お金をくださるやうにねだります。そして一人の子供がそれに成功すると、他の子供もそれを楯にとつて親に小遣錢の増加を迫るのです。ですから、何よりも親達が共同して此のやうな傾向に就いて相談し合ふことが必要です。さうでない、子供の奢りは益々増長するばかりです。そして唯つた一人の親の力だけでは、この傾向を止めることが逆も

出來るものではありません。

この悪い傾向は殊に中學校や女學校の時代に甚しいやうです。この時代の青年は、仲間の自由にお金を使ふのを見て、自分にそれが出來ないと何だか肩身が狭いやうに感ずるのです。親達が小遣錢の増加を斷ると、青年は理由なく恨む場合が多いのです。そしてそれが子供にも面白くないものだから遂ひ悪いことをするやうにもなるのです。即ち、こつそりと親の財布から掠めるやうなことは有勝ちのことです。多くの子供は、親のものを子供がとるのは大して悪いことではないと思つてゐるのです。しかし此のやうな行ひから延いては他人のものを盗むやうになつたり、または其の他の色々の悪いことをやるやうにもなるのです。

## 子供に貯金の利益を飲み込ませるのは難しい

いまお金を使つてしまふのと、それを貯へて置いて、後でもつといふものを買ふのと、どちらが利益だかといふことを教へるのは、最も大切な金銭教育の一つです。大概の大人はお金を貯めるのは結構なことだと決めてゐるけれども、子供の方では、一時貯めて置いて後で何かよいものを買ふよりも、いま欲しいものを直ぐ買ふ方を非常に喜ぶものです。尤も子供は親の意見に従ふでせう。しかし、後にもつと必要なものを買ふために今はお金を使はずに置くのは、果してどれほど利益なものやら、子供には解らないのです。それを解らせるには實際に其の利益なことを経験させなければなりません。そこで両親は出来るだけよい條件の下に子供に此のやうな経験をさせるやうにしなければなりません。

ん。子供は始めのうちは「後で是々に使ふからそのお金を貯めて置くんだよ」と言はれればその通り貯めるでせう。しかし子供は長く待つてゐることが出来ません。直ぐに使ひたくなります。そして何か買へば子供は非常に満足するのです。もしさうでなければ、子供は斯う考へます。「お父様は嘘ばかり言つてゐる。僕にお金を貯めさせるのは、きつとお父様がどうかするつもりなんだ。」それですから、貯金が子供を眞に満足させるやうな経験を自然に子供に與へるやうにするのが一番よいのです。

## 子供の買ひたがるものは何か

自分の選んだものを自由に買へる子供に、自分の使つたお金の勘定をさせる  
と、その結果は、子供の性質に従つて十人十色です。或る子供はお金を主に

菓子を買ふのに使ひます。或る子供はリボンを買ひます。或る子供は活動寫眞を観るのに使ひます。大人と同じやうに、子供も何か特別に好きなものがあつて、それのみに無暗にお金を使ふこともあります。子供は自分の持つてゐるお金で何を買はうかなんてことは餘り思案しないものです。多くの子供は自分の常に好んでゐるものがあるから、思案に及ばず、それに使ふ目的でお金をポケットに仕舞ひます。例へば或る子供は髪に飾るものを買ふために、或る子供は貸自轉車に乗るために、また或る子供はクリスマスのやうな特別の日に使ふために、それ／＼お金を財布に仕舞ふのです。

子供は誘惑され易いものですから、それを充分監視しなければなりません。そして、たつた一つのものや、直ぐ無くなるものに、持つてゐるお金を皆んな使つてしまふやうなことの無いやうに氣をつける必要があります。しかし、前

よりも餘計満足を得るつもりで使つたのに、その結果は反つて前よりも楽しみが少なくなつたといふやうな場合もあるから、このやうな場合には、趣味の相違の結果であるから、餘り世話を焼かないで、子供の一番楽しむものに勝手にお金を使はせた方がよいのです。けれども、子供が、あまり望ましくない事や、他の楽しみに代へるによいやうなことにお金を好んで使ふやうだつたら、親達は充分干渉してよいのです。そして、さういふことに世話を焼けば、やがて子供は、自分の特別に好きなものに毎年二體幾らほどお金を注ぎ込むのか、それを計算してみるやうになるのです。

### 子供に自由意志を發達させよ

子供の意志を打ち碎いた方がよいと信じてゐる親は殆んどありません。大概

の智識ある親達は、子供の意志を發達させ、強めさせた方がよいと信じて居ります。或る親は、子供に高い理想を抱かせることによつて、子供の意志を發達させ、強めさせようとしています。また或る親は、子供に或る考へを實行させるために絶えず特別に監視して、それで子供の意志を發達させ、強めさせようとしています。第一の方法は理想的ではありませんが、永續きしないで、効果は尠いのです。第二の方法は、或る型の通りに機械的に行ふ癖をつけますから、新しい事情に出會したとき、どうしていゝかわからなくなりません。兩方共に必要です。そしてそれに加ふるに、次いでとるべき態度を自分で選ぶやうにならなければなりません。勿論子供が最も高いものを望んだり、最もよい振舞ひをしたりすることは出来ません。しかし傍に忠告する人があなくても、子供は、自分でうまく、自分に利益なものゝ方を選ぶ能力を持つてゐなければなりません。そして

て、自分に利益なものゝ方を選ぶばかりでなく、自分を監視してゐる者があなくても、構はずに、自分の選んだ方を、どこまでも主張するやうでなければなりません。

このやうに、自分で自分の好むところを選び、そしてそれを主張するといふことに、大へん必要な訓練があるのです。子供に或る一定のお金を與へて、それを自由に使はせるのが、つまり一番よい訓練の方法なのです。或るところに二歳半になる子供がありました。この子供はピカ／＼する五錢銅貨でお菓子を買いました。お菓子を食べてしまつてから、さつきの五錢銅貨を取り返しにお菓子屋へ行きました。勿論菓子屋では白銅を返してくれません。そこで一旦使つてしまつたお金は再び取り返すことが出来ないのだといふことを初めて悟つたのであります。同様に、二つのものが欲しくても、一方だけしか買へない子

供は、先づ自分に一番利益になるものを選ばなければならぬといふ氣を起すのです。しかし子供が實際に自分の好むところを自分で判断する能力を鮮かに發揮する場合は極めて少ないのです。多くの場合、子供は自分のしたことがどんな結果になるのか少しも知らないのですから、親達の方で子供のために判断してやらなければなりません。そして、親の意見を聽いてゐるうちに、子供は、どんな選び方をすればどんな結果になるかといふことを學ぶことが出来るのであります。もしも子供が、一週間毎日お菓子を買ふのを止めてゐて、その代り幾日も楽しむにいやうなものを買つたならば、その子供は、一時の楽しみを捨て、永續する楽しみを得た方がよいといふことを眞に悟るでありませう。

## 第六章 お駄賃とお祝儀に貰ふお金

### お駄賃やお祝儀をあてにする子供もある

多くの子供を観察してみると、子供の大多数は、十代に達するまで、乃至は年頃になるまでは、ちよいくとお駄賃やお祝儀のお金を貰ふものです。次に擧げる事實によつてみましても、子供は色々なことで貰ふお金を、自分のお小遣の補助にするものだといふことが分ります。

「私は決して定まつたお金を貰ひませんでした。私は何か欲しければお金をねだりました。もし買つていゝものであればお金を下さいました。それが大へん嬉しいものでした。私はそれから家の人達のお金をもちよい／＼使ふことが出来ました。しかし家の人達は、そのお金を私が何時何に使ふのか、よく知つてゐました。私もまた、そのお金で買へるものと買へないものとをよく知つてゐ

ました。」

「誕生日毎に、私は年齢に従つて幾らかづつお金を貰ひました。それを貯金箱に収めました。クリスマスのお祝儀に貰ふお金も矢張り貯金箱に収めるのでした。しかし實際はちつとも貯金心などはなかつたのです。だから大きくなつてから何も貯へたことはありません。私は金銭の使用法や価値に就いては何んの考へも持つてゐませんでした。今でも私は自分でお金を儲けたときには、唯だそれを使ふことばかり考へます。」

子供は誰からお駄賃やお祝儀を貰ふかと言ひますと、先づ親か、親類か、乃至は訪問客からです。子供といふものは、自分の誕生日には親類かお客かから、いくらかづつお金を貰ふてがあるといふ事を知つてゐる場合もありますが、しかし大概の場合、何時貰ふか、または幾ら貰ふか、といふことは知つてゐま

せん。

或る人が言つてゐます。「お友達から貰ふお祝儀のお金は、殆んど皆な年上の友達から貰ふのでした。そして今考へても厭なことに、私は、年上のお客の顔を見さへすれば、直ぐにお金を貰ふことを考へたものです。私の家へ訪ねて来るたびに、私にお金を下さる人がありましたが、私はその人の訪ねてくる前に、「あの人が貰ふお金を加へると貯金が幾らになる」といふことを、ちやんと胸算用するのです。」

一定の組織だつた方針に従つてゐない場合は、大概、子供にねだられたとき親が子供にお金を與へる習慣になつてゐます。或る場合には、子供はねだれば殆んど何時もお金が貰へます。或る場合には、先づ親が「何にお金を使ふのか」と尋ねます。そして、親がそれに賛成すれば、子供はお金が貰へます。

このやうに一定の方針に従はないで慢然とお金を與へる家庭に於ては、子供は、親類や、友人や、又はまるつきり他人の用を足してお駄賃を貰ふことが屢々あります。尤も、このやうなことを許さない家庭もありますが、それは極めて少数です。この場合、お駄賃の性質として、やつた仕事の割合には過分に貰へるのが普通です。

### 心 附 け の 害

此のやうなお駄賃は一種の「心付け」です。そして子供に心付けをやつたりすると、その子供は大きくなつてから後にも、お金を得る眞の方法を考へません。尤もその子供が大きくなつてから心付けを貰つて暮らす階級のものになつた場合は別問題です。心付けを貰ひつけてゐる子供は、他人に對しては行儀

よく且つ親切で、そして、自分の貰つたお金の多い少いを氣にかけるやうになり易いものです。一般に、この心付け主義を信用する連中は、嚴密に仕事の報酬として仕事相當のお金をくれるよりは、寧ろ、その時の自分の好悪の感情に従つて不公平にお金をくれるのを喜ぶものです。東洋諸國では、多くの仕事は、大概個人的便利を基礎としてゐます。それだから、或る人が勝手に、知人に品物をやるとか、仕事をしてやるとかすれば、さうされた人は、その御禮に、贈物をやるとか、またはお金をやるとかするのであります。かうしてお互ひに五分々々の便利を得るでありませう。そしてそれと同時に、「人のためになることをしたから、その人から親切を受けたのだ」と感ずるでせう。しかしアラビアの智識階級では、このやうな友達同士の間の取引は衰微しかけてゐるやうです。

亞米利加では、友達同士の間だからといつて格別取引に變りがありません。

その代り、物の一定の相場をちやんと辨へてゐるのです。それだから獨立心に富んだ亞米利加人は、心附け類似のお金を貰ふことを望みません。あくまでも仕事に相當した公平な正常な報酬を望むのです。一方に於ては、亞米利加人は、社會的便利を與へ且つ受けることを充分に心がけてゐます。そして、ためになることをしてやつたお禮として何かを貰ふといふやうな取引には熱心に反對します。

もしも獨立心に富んだ亞米利加人が、その國の最も代表的な國民であるならば、子供もまた何時かは、嚴密に仕事を處理する準備として、矢張り、心附けを喜ぶ根性を排斥する訓練を受けるでありません。もしも我々が東洋諸國の習慣を信用し、そして、子供に、玄關番や給仕になる準備を與へたいならば、ふしだらに心附け類似のお金を與へても一向構ひません。

### 幾歳になつたら與へる金額を一定するか

子供が一番初めにお金を得るのはどういふ場合かといふに、矢張り心附けとして貰ふ場合が普通です。それであるから、極く幼い時分には、あらゆる點で親の注意と保護とを受けると同時に、金錢のことも同様に親が萬事萬端氣を附けてゐなければなりません。そこで此處に起つてくる主なる問題は斯うです——『金といふものは相當の努力をして初めて得られるものだ、といふことは、幾歳位るときから教へたがよいか。』『子供は何時自分でお金を儲け初めるのがよいか。』『幾つになるまで、子供の貰ふお金が不定でよいか。』

子供はお金を儲け初める前に、先づお金を與へられて、それを使ふ方法を覚えなければならぬことは言ふまでもありません。そして、子供に與へるお金は、



最初は、一定してゐない方がよいのです。子供がお金を使ふことを幾分覚え、そして勘定する能力も少しは出来た後で、初めて、一定の額のお金を與へるやうにするのが訓練上意味あることです。

子供が幾歳になつたら、不定にお金をやる方法を止めてよいか？ 或る親は、子供が年頃になるまで、またはもつと後までも、それを止めません。多くの親は、子供が十四か十五になつたとき止めますが、しかし子供は學校に行くやうになる前に既に一定の小遣錢で以て買物の案を立てることを覚えてもよいのです。或る人は、自由にお金を使ふ考への餘り強く發達しないやうに、最初からお金を一定の額に限る考へを發達させなければならぬと考へてゐます。多くの子供は、年頃になると、自分の貰ふお金を幾らでも多くしたいといふ欲望を高めて行きます。勿論、これは、貰ふお金だけでは買ひたいものも充分買へ

ないといふ場合に多いのです。このやうな場合には、子供といふものは、いくら使つたらよいか豫め胸算用する方法を覺えないうちは、充分に或は恠口に案を立て、お金を使ふといふやうなことは出来るものではありません。

子供は、用途をしたお駄賃としてお金を貰つてはならない。唯だお互ひに親切を盡し合ふお禮として貰はなければならぬ。即ち、子供は命令けられたときには何時でもそれに従ひ、そして年上の人がお金を呉れたいといふなら、それを貰つてもよいのだ、と斯う主張する人もあるかもしれませぬ。或る家庭では、此の方針を大へんよく實行してゐます。この場合「金を儲ける」といふ考へは、「親切を盡す」といふ考への次ぎになつてゐます。用事をした報酬として親から幾らかづつ貰つてゐますと、その子供は「金といふものは仕事をして得るものだ」といふ事を覺えます。しかし、そのときどきに親から貰ふお金が甚

だ不同だといふと、「この用を足せば一體幾らになるのか」といふことに關しては明白な考へを持つことが出来ません。また、お互ひに親切を盡すといふ考へは、仕事をするといふ考へよりも前に發達させられなければならない、と主張する人があるかもしれませぬ。しかし、仕事をするといふ考へを早くから持つことは、決して親切な行ひを妨げるものだと言ひ斷ることは出来ません。このやうなことに就いては、どこにも當てはまる法則といふものを、定めることは出来ないのです。或る家庭では、時を選ばず心附けを子供にやるのが好い結果を生じて、他の家庭では悪い結果を生ずるといふこともあるのですから——時として子供は、お金が欲しいばかりに、おとなしくする事があります。おとなしくした爲めに貰ふお金は、實際働いて貰ふお金よりも澤山な場合が多いのです。また或る場合には、子供は、「この用を足せばお金が貰へるかしたら」とか「い

くら貰へかしたら」と胸算用をしてみます。そして、思つたほどお金が貰へないと考へたときには、命令けられた用を足すのを拒みます。さもなくば、しぶしぶ用を足すのです。

物の分つた人々は、子供に時ならぬ心附けをやつたり、不定のお駄賃を與へたりするのを、いつまでも續けようとは思つてゐません。彼等は其の時代と其の土地に適した金錢教育を子供に授けようとしてゐるのです。けれども、金錢上で幼い子供を取扱ふ方法に就いては、言ふべきことが澤山あります。その方針は、家庭の事情と、子供の個性とによつて、色々に變へなければならぬのです。

## 第七章 定額の小遣錢

貧乏な家庭の方が小遣錢にだらしが無い

一定のお金を子供に與へるのは、貧しい家庭よりも、富裕な、または相當な家庭の方に多いやうです。シカゴ市では、或る私立學校に通つてゐる富裕な家庭の子供の三十五パーセントは、一定のお小遣を貰つてゐました。貧乏人の子供の多數は、自分でお金を儲けます。それから、ふしだらに、僅かばかりのお金を貰ふこともありまゝです。合衆國兒童労働委員會の調査によりますと、十四歳から十六歳までの子供の唯だ半数だけが、自分の儲けたお金のうちの或る一定の金額を與へられてゐたさうです。他の半数は、儲けたお金は何時も自分勝手に

全部使つてゐたのです。

一定の小遣錢が與へられると、不定の心附けは少なくなつて行くのが普通です。そして用を足した報酬も、仕事相當の賃銀となるのが常です。しかし凡てがさうだといふものではありません。一定のお金が與へられても、それと同時に、子供は其のお金以外にねだれば何時でも貰へる場合もあります。こんな場合には、一定のお金を持たせるといふ根本の理由は大部分無意味になるのです。子供は、貰ふお金には尠くとも幾らといふ定まつた額があるものだ、といふことを知つてゐますが、しかし、あとからお金を追加して貰ふやうだと、子供は、買ひたいものは何んでもどしどし買つてもよいものだといふ考へを止めないものです。このやうな事情は、一定の小遣錢を與へてゐる場合よりも不定の心附けを與へてゐる場合に多く生じます。Sioux 市の子供の殆んど三分の二は、毎

週親からお金を貰ふのだと言つてゐます。このうちの半數は、多分實際に一定のお金を貰つてゐるのでした。他の三分の一は、毎週と決めないで、唯だ時々お金を貰ふのでした。年かさの子供、殊に少年は、幼い子供よりも貰ふお金が少ないものでしたが、これは明らかに彼等が自分の手でお金を儲けるのをあてにしてゐるのだといふことを示してゐるのです。

けれども多くの家庭では、子供が自分の使ふ一定のお金を得る唯一の手段は、やはり一定の小遣銭を貰ふよりほかありません。これは田舎でも都會でもさうです。殊に近代になるほどさうです。それだから、小遣銭を貰へるといふことが重要な問題になるのです。

### 小遣銭の金額はどうするか

子供に小遣銭を貰へるには、その金額の問題が大切です。子供は、他の子供が自分よりも金持なことを鋭く心に感じないほど、充分お金を貰はなければなりません。

しかし、子供に貰へるお金を、子供の現在の幸福に必要なだけに止めて其れ以上のお金を貰へないこと、或は、大人になつてから身分不相應の贅澤をする習慣をつけるほど餘分のお金を貰へないやうにすることは、尙更大切です。欲しいものを何んでも買つてやるのは子供にとつてはよくないのです。欲しいものを何んでも買つてやつたりすると、子供は、お金を貰ふのには限りがあると、いふことを忘れてしまふばかりでなく、自分のお金を有効に使ふ案を立てる楽しみと訓練とを失ふのです。

これを要するに、子供に貰へる金額を決めるには、先づその子供の年齢を考

へなければなりません。それから、住んでゐる土地と友達の状態に應じて、その子供の欲望を考察しなければなりません。殊に友達を考へに入れることが必要です。小遣金を餘り自由に與へ過ぎて、子供がそのお金を何に使つてよいか分らないやうでも困るし、欲望を餘り勝手に満たすやうでもいけません。初めには、澤山やるよりも、僅か與へる方がよいのです。そして、大きくなるに従つて金額を増してやるのです。しかし自分で儲ける機会が多くなつたら、増すには及びません。お金を貯へるのを好み、そして一時の楽しみよりも、さうでないことに、用心してお金を使ふ子供には、貰つたお金を直ぐ使つてしまふ子供よりも安心して澤山お金をやつてよいのです。

小遣金の金額は、子供の買ふものに從つて色々でなければなりません。もしもその子供が、僅かの品物を買つて臨時の費用を拂はなければならぬ場合にお金の大部分を自分自身の楽しみにばかり使つてしまふ場合よりも、餘計お金を與へてもよいのです。その子供がお金を貯めてゐるかどうかといふ問題も考へなければなりません。一般に子供の小遣金は、主として必需品に、若くは、贈物や、日曜學校の獻金や、其他の有益な寄附金などに使はれなければなりません。自分自身の楽しみに使ふのは極く小部分でなければなりません。

#### 年頃になつた少年少女の感情を考へよ

十代の子供の小遣金を定めるには、その實際の必要を考へるばかりでなく、友達を買ふのを見て自分も買ひたくなるその心持をも考へてやらなければなりません。子供に餘り儉約を強ひて、そのためにその子供の目にも友達の目にも、肩身が狭いやうではいけません。それだからと云つて、見せびらかして使ふは

と餘分にやつてもいけません。もしも子供が自分でお金を儲けるに、やうになつたら、餘計な贅澤に流れないやうに自分で警戒しなければなりません。年頃になつたばかりの子供は、如何に社會的に感じ易いものであるか、そして、その頃の子供は、他の子供の眞似の出来ないのを如何に鋭く殘念がるものであるか、といふことを目のあたり見る親は極く少數です。或る人は、肩身の狭い心持が表面的には氣がつかなくても、青年の時に心に湧いたのを決して否定しません。青年の時貧乏だつた人々で、お金を無暗に見せびらかして使ふのは、自分では氣がつかなくても、自分に札つびらをきる金力が出来たのが嬉しくて、それを發揮してみたいからです。そして、自分の豪奢振りを他人に見せつけてやりたいからです。

### 子供に借金を許してよいか

小遣錢の金額を定めるばかりでなく、それを與へる「時」も定めなければなりません。一般に子供には小遣錢を前貸してはいけません。他の方法で借金をするのも善いことではありません。何にも構はずだらしくお金を借りるといふやうなことは大人の場合には起りませんが、子供の場合でも矢張り、ふしだらにお金を貸さない方が子供のためです。何かよい利益になることに使ふとか、實際に必要なものを買ふとか、或は、今買はなければ無くなるもので價値あるものを買ふとかいふ場合には、大人でも子供でも、借金してよいでせう。しかし、後に拂ふあてがなければいけません。

前借は一般によいことでなく、且つ、特殊の事情の無い限り、奨励すべきも

のではありません。しかし、場合によつては禁じなくてもよいことがあります。馬鹿らしい借金をして、拂ふのに大へん困難したといふやうな経験は、厳しい禁制や百の説教よりも遙かに價値ある訓練を與へます。子供がお金を借りようとして苦心してゐる時、それを直ちに助けてやつてはいけません。その子供は先づ忠告で以て急場を救はれるのもいゝでせう。また時としては、金を儲ける好機會を教へられて救はれるのもいゝでせう。しかし、とにかく、常に自分の道は自分で開拓するといふ教訓的經驗を持つやうにさせられなければなりません。未來の事を考へないやうな傾向の子供には、金を貸すのを斷る必要があります。そして、もしも子供が家庭以外で金を借りたならば、その子供には、小遣錢をやるのを止めてしまはなければなりません。

### 小遣錢は貸銀であつてはならぬ

小遣錢をやることに關聯して起るもう一つの問題は、子供に或る仕事をやらせることの研究です。四五歳の頃から、子供が毎日或る仕事をするといふことは大へん結構です。子供自身の着物や部屋に關した仕事でもよいのですが、それよりも家庭全體の爲めになる仕事なら尙ほ結構です。これは、誰れでもやらなければならぬ一般の社會生活の下準備であります。

或る點から考へると、子供は一定の小遣錢を貰つて、そしてその返禮として或る一定の義務を盡します。しかし此のやうな考へは實際小遣錢を貸銀と同一視してゐるのです。この場合小遣錢の金額は、果たされた仕事の割合で定められなければなりません。しかし、自由にお金をくれて、自由に用を足すといふ

意見の方が尙ほ結構です。この場合、子供は、親から着物や食物を與へられるのと同じやうに小遣錢を與へられるのです。そして、家庭の自分以外の人のやると同じやうに、子供も何か家事の手傳ひをします。即ち親は報酬を求めないで子供にお金をくれます。そして子供も報酬を求めないで家庭の仕事を手傳ふのです。この方が、理論上にも實際上にも、よい方針です。親と子供の金錢關係がすべて、嚴密に仕事をさせたりしたりする事を基礎とするのは、結構なことではありません。そして、此のやうな事情を防ぐには、自由に小遣錢をくれるのが一番よい方法です。もしも金錢關係が仕事を基礎としてゐるやうに想はれる場合には、何時でも眞實に事務的に規則正しく監督されなければなりません。さうすれば、子供は、「どんな風に仕事をすればよいか」、「仕事をすれば何時もどれほどお金が貰へるか」といふことを覚えるのです。しかし多く

の家庭では、子供の貰ふ小遣錢に相當するお金を拂ふやうな一定の仕事をみつけるのは困難です。さもなくとも、小遣錢の増すに従つて、仕事の方もうまくなるといふわけには行きません。

もしも子供が一定の仕事を果たさないならば、親はその子供の一定の小遣錢から幾らか差引く——これも、事件を仕事の基礎の上に置く傾きがあります。殊に小遣錢が、果たさなかつた仕事の割合で差引かれる場合にはさうでありまゝす。けれども、これによつて、事件を社會的基礎の上に置くことが出来ます。家庭は一の社會的團體に屬して居ります。凡ての人は各自の仕事を持つてゐます。そして皆な自分の使ふお金を儲けるのです。自分の仕事を果たさない人は、この團體の一員となることが出来ません。そして他の人の儲けるのを、指を喰へて見てゐなければなりません。けれども、一般に、果たされた一定の仕事と、



貰ふお金との間には、或る關係があるといふことを、幼い子供に、話して聞かせたり、感じさせたりするのは、餘りよいことではないのです。

自分で案を立て、お金を使ふやうにさせるがよい

毎週一定の小遣錢を子供に與へるのに、極く僅か（五十錢以下）しか與へない場合は極めて稀れです。幼い子供が未だ澤山のお金を上手に費へないうちは、極く僅かしか與へない方がよいのです。十代の子供の場合には、買はなければならぬものと、家庭の事情とに従つて、先づ五十錢から四五圓がよいのです。（以上アメリカの社會を標準としてゐる。）

殆んど凡ての子供は、時々思ひがけない心附けを貰ふのを好みます。尤もその心附けが極く僅かで、そして、小遣錢の内に加へることの出来ない場合は別

です。儲ける機會を見つけるのは、収入を増す場合です。一定の小遣錢を與へられてゐる子供の大多數は、そのお金を好き勝手に使ふのを許されてゐます。しかし少數の子供は、勝手にお金を使ふのを嚴禁されてゐます。そのために、自分で案を立てたり選擇したりしてお金を使ふ教育的經驗を積まないでしまふのです。或るお母様は、七歳になる子供に一週間に二十錢を與へました。そして、そのうち、二錢はお菓子に費し、十二錢は教會と日曜學校に寄附し、六錢は貯金箱に納めるのでした。このやうに、萬事母親の指圖に従つて小遣錢を費ふと、自分で案を立て、お金を使ふ能力を養ふことが出来ません。寧ろ子供の金錢にはちつとも注意しない母親を持つた方が、子供の幸福です。

## 第八章 子供のお金儲け

### なぜ子供はお金儲けを好むか

どんな子供でも大概お金を自分で儲けるのを好んでゐるやうに思はれます。殊に亞米利加の子供はさうです。シークス市では、二千七百人の子供の中の九十七パーセントはお金を儲けるのを望んでゐました。そして唯だ一パーセントだけが、自分で儲けないで、ふところ手でお金を得たいと望んでゐました。然らば何故お金を自分で儲けたいのかと其等の子供に訊いてみましたら、先づ次のやうな理由によるのでした。

(一) 獨立したいため

(二) 有益なことに使ふため

(三) 單に使ふため

(四) 貯金するため

(五) 樂しみをするため

(六) 親を助けるため

(七) 金持になるため

(八) 教育を受ける資金を得るため

バルマー嬢の調査によりますと、シカゴ市の貧民窟では、男の子の七十一パーセントと、女の子の五十九パーセント半とが、現にお金を儲けてゐました。然るにそれよりも生活のよい場所では、男の子の十八パーセント十分の五と女の子の十四パーセント十分の八とがお金を儲けてゐました。

お金を儲ける方法を論理的に行ふには、先づ、子供は、貰ふお金に相当した仕事をしなければなりません。ところが多くの親は此の方針を實行しません。多くの親は、子供が十歳か十二歳になるまでは別の方針に従つてゐます。そして仕事に相当しない賃銀、即ち仕事の割には餘分のお金を與へます。さうでなければ、何かにつけて色々とお金を與へて儲けたお金の補助にさせます。多くの場合、お金の使用方法を覺えるまでは、子供に何もさせないで、お金だけを與へて置いて、それから次第に右の方針を實行するのが一番よいのです。さうして置いてからその子供に、今度は賃銀に相当した仕事をさせるやうにすると、子供はやがて、お金は如何して得るものであるかといふことを覺えるでせう。子供は、「お金は稼いで得るものだ」といふことを覺えた後で、こんどは、「どれ位稼げばどれ位のお金になるか」といふことを覺えます。子供が、初等の練

習を既に受けてゐて、欲望を満たす傾向の進んでゐる最中には、少しぐらゐ餘分のお金を與へてもよいのです。しかし子供が、お金を勘定することが出來て、そして時間と努力と仕事とに以前よりも一層明確した考へを持つやうになつたときには、なるべくその子供のした仕事に相当しただけのお金をくれるやうにしなければなりません。

### 子供の世界にも樂あれば必ず苦がある

働いた仕事に不相當に餘分のお金をやるのは、子供のために甚だよくありません。何故といふに、さうしますと、子供は、自分のした仕事を非常に高い價値のあるものゝやうに考へますから、他日獨立した場合、自分の儲け丈けでは不満足を感じるやうになるからです。且つ、或る欲望を満たすためにはどれは

と稼がなければならぬか」といふことに就いても誤つた考へを持つやうになります。そこで、少し稼いで、うんと費はうといふ氣にもなるのです。「樂あれば苦あり。」とは、大人にも子供にも當てはまることです。

### 子供は無報酬で働かなければならぬこともある

子供に仕事をさせてお金を拂ふやうにしてゐますと、此處に一つの悪弊が生じます。それは、「どんなことを手傳つても、いつも必ずお金を貰はなければ氣がすまない。」といふ考へを子供に持たせることです。かういふ考へは充分氣をつけて防がなければなりません。或る種の仕事、殊にお金を拂つて貰ふ約束をした仕事をしたときに限つて、お金が貰へるのだといふことを、よく子供に飲み込ませなければなりません。子供は家事のお手傳ひなどはお金を貰はずにや

るやうでなければならぬのです。

お隣の人の用を頼まれた場合なども、子供はお金を貰はずにその用を足して上げた方がよいのです。例へば、「お隣の人が町へ着物を注文に行くといふから、序にハガキを買つてきて頂かう。」といふやうな場合には決して駄賃を拂ひません。子供の場合も同様です。けれども、特別の好意でお駄賃をくれるといふなら、貰つてもよいのです。

子供が全く自己流の方法で、お金を儲けるのを防ぐためには、或る一定の訓練が必要です。この種の訓練で効果のあるのは、次のやうな例話です。

### 「文吉の請求書の話」

或る朝、文吉が朝御飯のとき、きちんと疊んだ紙片をお母様のお膳の上に置

きました。お母様はそれを開いてみました。その紙片には斯う書いてありまし  
た。

文吉がお母様からいたゞくお金

一金五十錢——用達をした分

一金廿錢——おとなしくしてゐた分

一金卅錢——音楽の授業料

一金十錢——其他

合計 金一圓十錢也

お母様は微笑しました。しかし何にも被仰いませんでした。そしてお午の御飯  
のとき、お母様は文吉のお膳の上に、さつきの紙片と一緒にお金を一圓十錢置

きました。それを見て文吉の眼は嬉しさに輝きました。そして自分の働いたの  
が直ぐお金になつたのだと考へました。ところが其の紙片の傍に別の紙片があ  
つて、それには次ぎのやうに書いてありました。

お母様が文吉からいたゞくお金

一金〇錢——おとなしくしてゐた分

一金〇錢——病氣の看護をして上げた分

一金〇錢——衣物、靴、靴下及び玩具の分

一金〇錢——食料と部屋代

合計 金〇圓〇錢也

これを読んで文吉の眼には涙が浮びました。そしてお母様の頭に抱きつきな

から、其のお金をお母様の手に返して言ひました。「お母様、お金をお返しします。どうぞ僕を可愛がつて下さい。僕は何んにもいたゞかなくても御用をしますから——。」

### 仕事をしない子供に自由を任せるか

一般に、お金を貰ふ仕事をするもしないも、子供の自由でなければなりません。これは凡べての自由労働の条件であつて、子供を訓練するにも、矢張り必要な条件です。もしも子供が何か働いてお金を拂はれる場合には、そのお金は、その仕事をする動機とならなければなりません。即ち、そのお金が欲しいので喜んで仕事をするといふ風でなければなりません。子供が無理に仕事をさせられる場合は、法則として、お金を拂つてはなりません。しかし、もしお金を貰

ふ約束で子供が仕事を始めたならば、その仕事の終るまでは、お金を拂つてはなりません。そしてちやんと仕事を終るやうに適宜に要求しなければなりません。豫定の通り仕事を終らない場合には、親の都合次第で、子供にお金を全部拂つてやつてもよいし、一部分拂つてやつてもよいし、または全然拂つてやらなくてもよいのです。契約の諸形式の上では、仕事を全部終らないときは一文も拂はれないことになつてゐますし、仕事の遅れたのは、一部分拂はれることになつてゐます。子供の場合にもこれを基礎とすればよいのです。さもなければ、「一旦初めた仕事は必ず終るまでやること。若し其の義務を盡さぬときは、拂ふお金のうちから幾らか差引くこと。」を主張するのがよいのです。

此等の方法のうちで、どれが一番よいかは、親が選ぶ訓練方法と子供の特長とによつて、色々に異ふのです。どんな場合でも、親が一旦選んだ方法を何處

までも續けてゐるうちは、晩かれ早かれ、その方法は子供に適當なものとなり、似合はしいものとなるものです。もし親がその方法を途中で止めたりすると、教育的効果は凡べて消えてしまひます。そして子供の方でも、「なんだつまらない。僕らはい、加減にあしらはれてゐるんだ。」といふやうに感ずるものです。

子供が自分で進んで或る仕事を引受けるには、その前に先づ金銭で満足させるに、欲望がつつてゐなければなりません。いろ／＼な欲望を持つてゐる子供は、その欲望を満足させるお金が欲しさに、非常に賃仕事を求めてゐます。しかし、現在格別の欲望も持つてゐない子供は、なんにも進んで仕事をしませんが、貯金を増すといふことも、仕事をする動機になります。しかし、直ぐ是々が買へるといふ考への方が、更に強い動機となります。それですから、いくら大きなものでも、幾月か幾年か経たなければ手に入らないといふやうな

ものは、或る特別な場合を除いては、子供の心を強く惹くことが稀れです。恰度子供といふものは、飢ゑたときはばかり働いて、未來のことは少しも考へない其の日ぐらしの大人のやうなものです。けれども、或る子供は、親の態度を學んで常に貯金をして居ます。しかし其の貯金を何に使ふかといふことに就いては、一定の方針を立ててゐないのです。

### 子供に給料を拂つてもよいか

子供はその時々々の仕事でお金を貰ふ代りに、毎週或る一定の仕事をして一定のお金を貰つてもよいのです。これは、何か特別な必要に迫られて單に其の時だけ働くといふのではなく、仕事を規則正しくやるやうにするといふ利益があります。それからまた、子供の勸定するに、定収入を與へるといふ利益もあ

ります。臨時に働いて臨時にお金を得るのだと、子供は、或る時にはうんと働き、或る時にはちつとも働かないといふやうな場合が多く起ります。かういふことは、子供にとつても、使ふ方にとつても、結構なことではありません。けれども、この両方の方法でお金を儲けてみるのも、子供にとつてはよい経験です。即ち、定仕事と時仕事です。そのいづれにしても、仕事がよく果たされ、時間が忠實に守られるやうによく氣をつけなければなりません。

時を定めずに仕事を命合る場合に起る困難の一つは、用をいひつけるために折角遊んでゐる子供を呼び戻さなければならぬことです。子供は遊んでゐるのを止めて用を達すのをいやがるものです。尤も、定仕事の場合にも此の困難はあります。しかし、うまく訓練すれば、定めの間になれば黙つてゐてもその仕事をするやうに習慣をつけることが出来ます。特殊な賃仕事の場合は困難

は一層大きいのです。子供が何か他の事に夢中になつてゐる場合、それを止めて直ぐ命令された仕事をするには、非常に意志の力が強くなければならぬからです。

或る親はこの困難に打ち勝ちました。その経験は非常に面白い結果をみせてゐます。七歳の男の兒が自轉車の稽古をしてゐました。そこで、金銭上でその子供を助け、且つ、命令されたときには何時でも仕事をするやうに訓練するために、次ぎのやうな契約が子供と親との間に結ばれました。「仕事を命合られた場合、どんな仕事でも早速文句なしにやれば、一週間に五十錢上げる——」幾つて、命令られても以前のやうに直ぐ應ずることはないやうになりました。子供は最初の契約を聞かされて、「若し役目を果たさなければ、契約は止める。さう



なればお前は他の賃仕事でお金を儲けなければならぬよ。」と言はれました。子供は直ぐ仕事を断つて、契約はお止めになりました。それから以後は子供は、賃仕事をして、その時々にかの金を貰ひました。ところが仕事がかさう澤山はなかつたから、従つて収入も僅かでした。二三週間の後、子供は羞しさに父の前に出て、もう一度以前の契約を結ぶやうに頼みました。父は拒絶しました。子供はもう長い間自轉車の借賃を拂ひかねてゐました。この経験によつて、子供は「一週間に五十銭」の定収入の有難味を悟りました。

## 子供を奮發させるやうな言葉

大概の子供は、ひとりで働くのが大へん困難なものです。定仕事にしても、時仕事にしても、出来るなら、年長の者と一緒に働いて、その年長の人を見習

ふやうにした方がよいのです。いづれにしても、子供のしてゐる仕事、またはしてしまつた仕事は、よく検査してみなければなりません。「どれほどしたか。」または、「どんな風にしたか。」をよく調べてみるのです。そして褒める機会を逃さないやうにしなければなりません。しかし、一方、出来るだけよくやるやうに子供に要求し、そして、非常な好結果を得るやうによく鞭撻しなければなりません。仕事のことを子供に話すときには、「この仕事は容易い」と言はぬ方がよいのです。「この仕事は難しい」と言つた方が一層刺激になるのです。そして、「難しい仕事だが、年齢の割には早くよくやつてゐる。」と言はれると子供は奮發心を起すものです。活潑な子供は、容易いことは面白がりません。反つて、「難しいこともするにいく。」といふところを見せたがるものです。

最も高級い藝術的な仕事は、報酬なしでなされます。しかしその代り快樂を

得ます。損な仕事でも手ごたへのあることなら、進んででもやるといふ場合にも、矢張り藝術的な仕事と同様の精神があります。即ち金銭よりも賞讃を求めます。子供は、「うまくやつた。」と言はれるのが嬉しいのです。そして斯ういふ風に讃められるのが働く動機となるのは、大へん結構なことで、出来るだけ永く続けたいものです。

#### なぜ年頃になれば學校をやめたがるか

子供は、十代になると非常に變化するものだといふことは誰も知つてゐます。どんな不注意な親でも、近代の兒童研究の非常に重大視する此の兒童の變化期には流石に氣が付きまします。しかし、どんな考へ深い親でも、この變化が肉體と同様精神にも如何に深く現はれるものであるかといふことには氣が付きませぬ。子供は年頃になると、人生の諸方面に對する凡べての態度が變化するものです。そして、子供が學校を止めたがるのは、十五歳の頃に一番多いのです。その主なる理由の一つは、お金を儲けたいからです。何もかも親に世話されてゐた嬰兒の時代が過ぎて、此の時代には獨立の本能が強くなつてきたのです。少年は最早何もかも他に世話を焼かれるのを物足なく思ふやうになつたのです。そして、現在の社會の事情は、少女にも同様の心を抱かせるやうになつてきました。

多くの種族では、子供が年頃になる時期には、盛大な儀式を行ひ、裝束を改めて、子供から大人になつたしるしとします。亞米利加では、自分の身につく財産を用意し始めるのが、大人になつた重大なるしるしであります。以前は唯だお金を儲けるのが望みでしたが、今は、自己尊重の念が起つて、「我々青年は金

「錢上で少しでも獨立したい。」といふ望みを持つやうに見えます。しかし全く他人の世話にならないといふわけには行きません。唯だ自分の収入になることを何かしなければならぬのです。そして自分の手で儲けたお金を使はなければならぬのです。お金を儲けたことのない者は、金錢の價值を充分に認識していません。もしも子供に金儲けの仕事をした経験がないならば、先づさういふ仕事をその子にさせなければなりません。そしてそれと同時に、なるべくいろいろの機會に出逢ふやうにしてやらなければなりません。

#### 經濟的に價值ある仕事にのみ金を拂へ

子供は、商業的價值のないことをしたときにはお金を與へられてはなりません。例へば、齒を抜くのを堪へてゐたからお金を上げるといふやうなことはい

けません。尤も、このやうなことは意志の鍛錬にはよいかもしれませんが。しかし、金錢のことに關して眞實の考へを子供に與へません。それからまた、成長した後、市民または役人になつた場合、賄賂を受取るのを當然と心得るやうな悪い考へを養ふことにもなるでせう。善行または勇敢な行爲は報酬を受けるのが當然です。しかし、その報酬は金錢そのものではなくて、社會的賞讃でなければなりません。賞められるといふことは、子供にとつては金錢以上に價值のあるものです。何か講話をして報酬を貰ふのは、演説家や俳優がお金を受取るのと同じことだから、よいけれども、「大人しくしてゐたから」といふのでお金を貰ふのは、結構なことではありません。

#### 家庭外の仕事はどうするか

家庭外で仕事を見つけてるのは、子供（殊に十代の子供）にとつてよい経験です。子供が商賣を始めてみるのも、至極よい経験になります。もし金儲けの方法が凡て親の援助も指圖も受けないなら、それは非常に有益です。お金が欲しいので、色々とお金を儲ける工夫をする子供は、成長して後に大へん有益になる経験を其時に積むのです。

子供の労働の弊害を防がうとする人達も、その價値ある方面を忘れてはなりません。多くの都會の家庭では、家庭内で金儲けの経験を得ることが出来ません。そこで、子供は十代になると早速、時間をきめて仕事に雇はれるやうになります。しかしこれは、工場などに雇はれるといふことではありません。仕事は、勉強や遊戯と同様に、非常に有益な経験になるやうに行はれなければならぬのです。報酬を貰つて一定の時間だけ働くのは、子供の思想の進歩にもな

り教育にもなりますが、しかしそのためには、その仕事は餘り困難でもなく、また餘り専門的でもないものでなければなりません。そして、勉強する時間や考へる時間を充分に残して置く必要があります。多くの子供は、一日に一二時間働いた方がよいのです。さうすれば働いて儲けるお金のお蔭で、他の場合よりも長く健全な状態で、勉強を続けるによいのです。

## 第九章 子供の仕事の實際

### 賣 子

子供のやつてゐる仕事は實に数が多いのです。靴磨は亞米利加の都會では長い間子供の仕事でした。しかし靴磨所は今では多く露肆の場所を占めるやうに

なりました。子供はまた新聞を賣ります。しかしこの仕事は今では多く中央の取次所で大人がやつてゐます。だから新聞賣子の主なる仕事と云へば、顧客に新聞を配つて歩くことです。子供が新聞を戸毎に配達して、亞米利加のやうに一週間毎に新聞代を集めて歩く場合、勘定をうまくやるには中々困難な修業が要ります。

新聞の拂込金を受取つて來たり、色々の小さな品物の賣子をしたりするのは子供に最適當の仕事だものだから、或る商館ではこのやうな賣子達の監督を置いてゐる位です。此等の商店では、賣子の子供に給料として、お金の代りに、子供の望む品物を與へる場合が多いのです。しかし多くの場合、品物は賣子の手腕で賣れるのではなく、顧客が子供を助けてやりたいばかりに、同情的に買ふのださうです。けれどもこの種の仕事が、子供にとつてどれほど有益である

かは、随分疑問です。

### 農 事

田舎地方では、お金を儲ける普通の方法は、先づ家畜を飼ふとか、土地を耕すとかすることです。不幸にも、親達は、子供がこの種の仕事をすることを許しません。或る農夫は、豚一匹と犢一匹とを持つてゐました。そして幼い息子にそれを何時も「これは僕の豚だ」「これは僕の犢だ」と云はせて置きました。その息子は自分の財産のやうにしてこの豚と犢との面倒をみてゐました。ところが或る日、親父はこの二匹の家畜を賣拂ひました。しかし、親父はその賣つたお金を少しも息子に分けてやりませんでした。このやうなことは一種の詐欺で、殊に此の場合は相手が子供ですから、一般の業務上の嘘よりも一層いけません。

もう一つの場合では、親は大へんのんきで、且つ自由でしたから、ふところ手で家畜を飼ふのを子供に許可しました。そして子供は家畜の飼料を平気で父親の物置から運んでくるのです。その家畜を賣つたお金は勿論子供が費つてしまひます。又もう一つの場合では、もつと一定した方針を立てます。そしてその方針に従つて、子供は積まは豚の持主となつて、それを飼育するのです。この場合、一定の計算をするやうにしてもよいのです。これは子供が年をとつてゐるときには最もよい方針です。

野菜や其他の作物を栽培するにも、家畜の場合と同じやうに、色々の方法が行はれてゐます。近頃は、役所や商事組合や學校などで、子供に耕作を奨励してゐます。南亞米利加や西部亞米利加では、少年のために穀物栽培俱樂部、少女のためにトマト栽培俱樂部を設けてゐるやうです。

子供は栽培の仕事をするばかりでなく、種子や肥料を買つたり、作物を市場へ運んだり、又収入や支出をちやんと勘定したりするのです。かういふことは子供に非常によい業務上の訓練を與へるものです。

### 其他の方法

都會でも田舎でも、子供は野菜や、果物や、草花を作つて澤山のお金を得ます。そして、市場でお金を儲ける傍ら仕事の経験を積みます。或る少女は、或る都會の片隅に花を作りました。そしてそれを賣つて殆んど四百圓を得ました。野生の果物や花を摘つてきて賣るのも、田舎や田舎に近い都會の子供のお金を儲ける手段になつてゐます。鐵砲や係蹄を買つて、獸を捕つてその毛皮などを賣るのも、子供のお金を得る一つの方法ですが、現在は昔ほど行はれません。

その代り兎や鳥や其他種々の小動物を飼養して置いて賣るのが大へん流行ります。これらの他にも、其の土地の状態や子供の才智に従つて、お金を儲ける方法が色々あります。そしてその大部分は、親達が手を出す必要のないものです。

#### 子供の仕事に伴ふ犯罪

殆んど凡ての場合、子供の手で爲される仕事は、その子供に非常に有益な金銭教育を授けるものです。この場合、子供は誰からも干渉されずに放つておかれた方がよいのです。けれども、親は子供のやつてゐることをよく知つてゐなければなりません。そして空家から煙突を盗み出して賣つたりするやうな悪いことをしないやうに、陰ながらよく監視してゐなければなりません。子供が裁判所に引致されるのは、多くは盗んだ品物を賣つた場合です。この種の罪人は

シカゴ市では一年に三百人もあるといふことです。

#### 子供のお金儲けは絶対に必要か否か

これまで述べ來つたところによつて想像される通り、お金を儲けることは、子供にとつて絶対に必要だといふわけではなく、唯だ子供がその欲するものを手に入れる手段としてお金を儲ける必要が起るといふに過ぎません。貧しい家庭では、親も子供も、共に、お金を儲けなければならぬと感じてゐます。これは決して望ましい事情ではありません。又子供が、幼いときから、生活の資を得なければならぬといふ感情に悩まされるのも、決して慶ばしいことではありません。極く幼い時分には、何から何まで世話を焼かしてゐた子供も、年をとるに従つて次第々々に、生計を立てる必要を感じるやうになつてくるもので

す。親は勿論生計を立てる責任を負はなければなりません、それと同時に、子供に餘り早くから餘り強く生計を立てる必要を感じさせないやうにしなければいけません。家庭の生活費は出来るなら親が得るに越したことはありません。しかし、子供は、自分の楽しみに使ふお金や、自分の衣服を買ふお金などは、早くから自分で儲ける工夫をしてもよいのです。

### 子供の仕事の利害

或る仕事に従事するといふことは、子供にとつては、お金を儲ける方法の最もよい訓練になります。けれども、あまり子供が仕事に身を入れすぎると反つて害になります。商賣氣が餘り早くから餘り強く發達するといふと、深切心が破られて、仲間の信用を失くする虞があります。子供が餘り金儲けに熱心にな

り過ぎると、人を欺いたり、不正直な手段をとつたりするやうになる虞があるのです。だから、親達は、子供のやつてゐる仕事が、何處で、如何なる風に行はれてゐるかといふことを、よく知つてゐなければならぬのみならず、仕事がどんなに進んでゐるかといふことをもよく見てゐなければなりません。そして、時々注意したり忠告したりして、子供の詐欺にかゝるのを防いだり、不正直な手段をとらないやうに見守つたりしなければなりません。

### お金を儲けた代表的な實例

「私が一番最初にお金を儲けたのは、さうですわねえ、私の四歳時分のことでした。お母様と私とで、早熟の林檎を五六籠とつて、通る人々に一個五六錢づつで賣りました。私の心の中には、唯だ單にお金を儲けるといふ考へよりも、樂



しいといふ感情の方が高まりました。

次ぎの事實は、或る日曜學校の監理人から與へられたもので、お金儲けを奨励した面白い實例です。

「二三年前、私どもの日曜學校の監理人が、日曜學校に五十圓を寄附して、それを生徒に分配しました。そして各生徒は、そのお金を一年間にどれほどに殖やすか試してみられたのです。私の級の生徒は一人前五十錢貰ひました。私はそのお金で鶏卵を十二個買って、親鶏に抱かせました。三週間のうちに七羽の雛が孵りました。そしてその雛が大きくなつたとき、私は牝鶏の雛を四羽賣り、その後牡鶏をつぶして賣りました。飼養料を差引いて、最初の五十錢が殆んど六圓になつたのでした。それから私はきれを買ひ、それで前掛を拵らへて賣りました。その賣上金を合計して私は殆んど十二圓といふ大金をつくりました。」

この經驗で私は、五十錢のお金も、僅かの時間と働力で、大へんに殖えるものだといふことを覺えたのです。』

## 第十章 貯金のこと

### 多くの親は貯金を迷信的に有難がる

前の章で私共は或る特殊な目的とする貯金のことを研究いたしました。この章では、そのやうな一定の特殊な目的があつて貯金をするのではなく、唯だ、漠然と後日に何かに使ふためにお金を貯へる場合を考へてみませう。

親は何よりもこの貯金の考へを子供に抱かせようとしてゐます。親は子供にこの思想の發達するのを望んでゐるのです。極く少數の例外は別として、苟く

も子供に金銭教育を授けようとする程の親は、いろいろな方法で、後日に或る定まつた目的に使ふお金を子供に貯めさせようといったします。或る親はこの貯金といふことを非常に重大視して居ります。しかし貯金が如何に子供の心に影響するものであるかといふことに至つては、ちつとも知らないのです。そして、宗教上の儀式とか迷信とかいふものと同じやうに、唯だ貯金といふものを無暗に有難がつてゐるに過ぎません。目に見えない力といふものは目に見える力よりも恐ろしく思はれます。儀式でも其の通りで、儀式が人に分らない結果を惹き起す場合には非常に強く人の心に影響するものです。貯金の価値も不定で不可知な場合には反つて迷信的に人に有難がられるのです。

### 貯金の眞の意味を理解せよ

貯金を迷信的に有難がらずに、貯金の眞の理由と、眞の有難味とを理解しなければいけません。しかし貯金の眞の知識は非常に發達が遅いものです。子供はお金を得ると、先づそのお金で以て今直ぐ欲しいものを買ふか、または後にもつとよいものを買ふのを楽しみに其のお金を今は使はずに置くか、この二つの道の何れかをとるのです。そして、この二つの考へ——即ち今費つてしまふといふ考へと、後に或る物を買ふまで待つといふ考へと——が發達した後で、始めて、後にまさかの場合に使ふのを豫想してお金を貯へる利益を理窟の上から理解することが出来るのです。

お金を貯へてゐないので、非常に欲しいものがあつても買ふことが出来ないといふやうな経験をさせるのが、後の必要に應ずるためにお金を貯へる利益を子供によく分らせるのに一番よい方法です。いま買ふのでも、後に買ふのでも

とにかく既に買ふと定まつた品物は子供の心を非常に刺戟しますが、それと共に漠然と後に何かに使ふだらうといふ考へでお金を貯へることも、子供の心を刺戟するやうにならなければいけません。即ち、既に買ふものが決まつてゐて貯金する計りでなく、唯だ、まさかの場合の用意に貯金をするやうにもならなければなりません。しかし、さうなるまでには、今申したやうな経験を度々積まなければならぬのです。

シカゴ市の子供の貯金を調査されたバルマー嬢のお話によると、貧乏人の子供の大多数は、衣服を買ふとか、クリスマスのお贈物を買ふとかいふやうな、或る定まつた目的でお金を貯めてゐますが、金持の子供は、それと反對に、唯だ單に漠然と未來に於て何かに使ふためにお金を貯へる場合が多いさうです。

次ぎの事實によつてみても、いかに子供は貯金の眞の意味を知らずにお金を

貯へるものであるかといふことが分ります。

「わたしは叔父さんからお金を頂きました。しかし私はそれに目をくれませんでした。なぜといふに、そのお金を貯金箱に入れなければならなかつたし、もし入れなければ是れからは貰へないといふことを知つてゐましたから。」

「極く小さな時分、お祖母さんがわたしのために貯金箱にお金を入れて下さつたのを覚えてゐます。しかしその頃は、わたしに使はせたくないならいつそのこと初めからお金など下さらなければいゝのと思つてゐました。その後、貯金のことやなんかを、何處からか、聞き嚙つてから、やつと、必要なときには、常には手をつけないお金をも使ふことが出来るやうになりました。」

このやうな場合に初めてお金の必要なことが分り、そして、このやうな考へが起つて初めて貯金の有難味がよく飲み込まれるのです。單に利益といふ上か

ら考へると、いま貯金の眞の意味を知つてゐても知らなくても、何時かは其の意味も分るやうになるでせうから、とにかく子供に貯金をすゝめるといふことは結構なことです。しかし、それよりも、早くから子供に貯金の眞の意味を飲み込ませて置くやうにするのが、尙ほよい方法であることは慥かです。

お金を貯へることの反對は、借金することです。お金を用意してゐる人は、何か買ひたいときには何時でも買ふことが出来ますが、借金をしてゐる人は、さうはいきません。寧ろ、お金が出来ても、借りたお金や其の利息を拂ふ爲に直ぐ元の素寒貧にならなければなりません。即ちそれは過ぎ去つた樂しみの費用を今拂つてゐるやうなものです。そこで子供は、金を用意してゐる人の場合と借金をしてゐる人の場合とを比較して考へるやうにならなければなりません。しかしそれよりも強い影響を子供に與へるのは、その子供の實際の経験と

友達の経験とであります。お金を用意してゐない者や借金をしてゐる者は、何か買ひたいものがあつても買へませんが、しかしそれだからと云つて、傍からお金を貸してそれを買はせたりしてはいけません。お金を呉れて借金を濟ましてやつたりしてもいけません。そんなことをしてやつては、實際の効力がなくなるのです。もし傍から補助したり借金を拂つてやつたりすると、その者はい氣になつて、遂には、お金を貯へたり用意して置いたりするのを馬鹿くさく思ふやうになるでせう。お金をバツバツと費ふのは、常にお金を用意してゐる者よりも、アブク錢を掴む連中に多いのを見ても、傍からお金を貢いでやることの弊害が分ります。

### 貯金を無理強ひする弊害

貯金の奨励は、自活してゐる人々の間には極く普通なことでありますから、今更世間の親御達に貯金の義務を述べ立てる必要はありませんまい。けれども、次ぎのことは特に言うてもよいでせう。即ち、子供のときの貯金は、青年男女にとつては大へんな助けになることもあるでせうけれども、しかし、最も大切な點は、單に「金を貯へる」といふことではなくて、「貯金の教育上の効果」であります。貯金をさせると、教育上よい効果があるからといふので、子供に貯金をさせる場合が多いのです。そこで、唯だ教育上によいといふ考へから、子供に無理強ひに、不自然に貯金をさせるやうなことになるのです。しかし、かうして無理に子供に貯金をさせるといふと、一旦その子供の境遇が變つて自分で自分の財産を自由に左右するに、いゝ身分になれば、忽ち貯金の習慣を止めてしまふやうなことにもなるのです。

効果のある貯金のすゝめかたには、無理に貯金をすゝめるやうなことをしないで、子供に貯金のために生ずる利益を實際に觀察させたり經驗させたりして、徐ろに、貯金思想を養ふやうにすることです。この貯金思想の養成と、金錢の最上の使用方法とは、金錢教育の最も重要な目的であります。

### 子供に普通な貯金の方法

子供がお金を貯へる最も普通な方法は、先づお金を小さな貯金箱へ入れて、それが少し溜つたところで、一纏めにして銀行へ持つて行くのです。また多くの子供は、郵便貯金をやります。共同錢溜箱に入れたり、親に保管を頼んだりするのは極く僅かです。親戚の人達は貯金ならどんな貯金でも奨励します。そして、子供にお金を呉れて、そのお金のうちの幾らかを貯金するやうに申しま

す。

子供は、お金を貯金箱に入れる代りに、年上の人の忠告に従つて、そのお金で債券または株券を買ふ場合もあります。またはポートとか自轉車を買つて、仕事を早くやる助けにした。遊戯道具にしたりします。次ぎに比較的普通な貯金方法の實例を擧げませう。

「六歳から十二歳までの間に、わたしは、貰つたお金を澤山貯へました。わたしは家庭貯金箱にそれを入れて置きました。そしてその箱に一杯になつたとき、取出して郵便貯金に移しました。」

「儲けたり貰つたりしたお金は殆んど全部貯金箱に入れました。わたしは家に小さな貯金箱を持つてゐたのです。そしてその箱に一杯になつたとき、取出して銀行にあづけました。お金のうちの幾部分は、お菓子やなんかに費ひました。」

「わたしの十回目の誕生日に、わたしはお父様から五圓札をいたゞきました。お父様は兄様の十歳の誕生日の時にも矢張り五圓札を兄様に下さいました。妹も十歳の誕生日には矢張りいたゞくでせう。わたくし共は、その五圓札を貯金箱に入れて、虎の子のやうに大切に置きしました。その年の夏、わたしはお隣りの人々の郵便を運んで一週間に五十錢づつ貰ひました。これも矢張り貯金箱に入れました。」

「六歳から十二歳まで、わたしがお金を貯へた唯一つの方法は、郵便貯金でした。お金は毎週、十錢ぐらゐづついたゞきました。そして、帳面が切手で一杯になつたとき、お金を引き出して、それを更に銀行にあづけました。これが、わたしが銀行に貯金する方法でした。」

子供に貯金させる便利な方法は、先づ貯金心を起させることです。貯金を實

際にやつて利益を得ることよりも、方法が面白かつたり、友達や大人のやるのを見たりする方が、却つて子供に貯金をする心を起させる場合が屢々あります。それは次ぎの實例をみても幾分解ります。

「お金のことで思ひ出すのは、極く幼い時分、自分の貯金箱に銅貨を入れるときの子供らしい嬉しさです。たしかそれは五銭を超えてはあませんでした。それで、二三日毎にわたしは貯金箱を開けてみました。そしてお母様はわたしの爲めに勘定して下さいました。それが大へん嬉しかつたものです。日曜日には、そのお金の幾部分を、得意になつて、日曜學校の獻金袋に入れました。わたし達は、「袋に皆さんお入れなさい、お入れなさい。一銭、二銭のはした銭。カチャリといふ音おきなさい……」と歌ひながら、獻金袋を持つて座席の間を歩きますはるのでした。或る誕生日には、わたしは級の前の方に獨り立ち上つて、

長い間大きな硝子の貯金箱に溜めて置いた澤山のお金を、獻金袋に入れました。そのときわたしは大へん幸福に、そして大へん偉くなつたやうな氣がいたしました。

うまい仕組や、儀式や、競争などは、幼い子供にとつては、有効な方法です。それは前に述べた實例によつて解ります。

しかし、青年の場合にはさうは行きません。青年は、貯金から自分なり他人なりが受けた利益に氣がつくと、一番貯蓄心を起します。毎週僅かづつ溜めたのが、一年か十年か経つうちに大へんな金額になつたのをみて、青年は大へん驚くのです。

「わたしは今でも直ぐ貯金箱に入れなければ貯金したやうな氣がしません。一時わたしは、自分の銅貨を小さな箱に入れて置いて、それが十圓になつたところ

ろで、初めて貯金箱に入れるやうにしました。これは最初の間はうまく行きましたが、其の後、わたしは特別のお金が入用になつたので、その小箱を開けて入用なだけのお金を取り出しました。いまでは、わたしは、自分の給料で、手袋とか靴とか、または其他の細かいものを買つたり、車賃を拂つたりするやうになりました。最初わたしは毎月の給料をぞんざいに費つてゐましたが、今では毎月二圓づつ貯金することにしてゐます。わたしはそのお金をお母様に送つて、家にあるわたしの貯金箱に入れて貰ふのです。もうひとつの方法は奇抜です。それは幼い時分のことですが、わたしは小くとも六つの小さな巾着に、いくらかづつお金を入れて、それを色々な場所に隠して置くのでした。そのうちの一つか二つは、つい置き場所を忘れてしまふこともありました。しかし、思ひがけな、とき、偶然それを見つけたりしたときの愉快は、何に譬へやうも

ありませんでした。」

## 第十一章 子供の金銭上の責任

### 子供の金銭上の責任とは何か

幼い娘がテーブルの上でコップをころがして壊したとします。或は男の子が窓に石を投げたとします。こんな場合どう處分したならいゝでせうか。多くの家庭では、こんなとき子供は打たれるか、叱られるか、或は今後を戒められるかします。さうでない家庭では、子供は「これは幾らのでしたか」と、こはしたものの値段を尋ねます。そして自分の貯金箱のところへ行つてみて其れだけのお金を持つて参ります。子供が自分のお金を持ち、そして自分の惹き起した



損害に責任を持つ場合には、その子供は當然自分の惹き起した損害をすべて償ふものとされてゐます。

このやうな責任は、八歳か十歳、もしくははもつと早くから養はれてもよいのです。金銭教育がそんなに早くから進歩するものだらうかと疑ふ人があるかも知れませんが、しかし子供は家庭を離れる前に、既に金銭上の責任を持つやうに教へられてゐなければならぬのです。

金銭上の責任は、他の色々の責任から獨り離れて發達するわけには行きません。責任の心を養ふのは、先づ、子供が自分の玩具は自分で始末し、持つべきものはもとの場所へかへして置くやうに言はれるときから始まります。子供が人形を壊しても新しく買つて貰へなかつたり、ぞんざいに取扱つたものは二度と持つことを許されなかつたりする場合にも矢張り責任の心が養はれます。

また、例へば、熱いものに觸ると焼傷をするといふことを豫め注意されてゐながら、厳しく監視されてゐないのでついつかかり觸つて焼傷をしたといふやうな場合にも矢張り責任の心が養はれます。このやうな経験をすると、子供は、「自分の行爲には必ず避くべからざる結果を伴ふものだ。」といふことを悟ります。

子供は、初めて自分の好きなことにお金を使ふのを許されたとき金銭上の責任を感じます。それから、お金を儲けるために何かしなければならなくなつたときに再び同じ責任を感じます。子供は、すべてのものは幾らかの金銭に相當するものだといふことが分り、そして、自分の持物が失くなつたり壊れたりした経験を味ふといふと、もはや金銭上の責任を感じる下地が出来たのです。八歳になる男の子が自分の自轉車を持つてゐました。そして雨の降る日に自轉車

を戸外へ出して置いたり、日光に曝したりしないやうに注意されておりました。ところが或る日その注意を破りました。すると忽ち輪が反つてしまつて、その修繕に四圓とられました。男の子は文句なしに修繕料を拂ひました。そして其後は大へん注意深くなりました。

所有と責任

子供は自分自身の経験から「他人のものは凡て幾らかの値に相當してゐて、若しも壊せば償はなければならぬ。」といふことを悟ることが出来ます。例へば、自分の持物を誰れか失くすか壊すかして、その者が新しく買つてかへすか、またはそれを買ふだけのお金をよこすかした場合には、自分も他人のものを壊せば矢張りかうしなければならぬのだと悟るのです。ものをよく壊した

子供も、自分自身の人形か箱庭を持つやうになると、他人の持物には手をつけないやうになるものです。自分自身曾て権利も責任も持つたことのない者が、権利や責任を理解することは大人でも困難ですから、子供には尙更困難です。だから、子供は、先づ自分で所有主になつて、その所有物を他人に失くされたり、自分で失くしたりして散々困つてみなければ、持物を大切にする氣は起らないのです。

子供が何かを損傷した場合、最初はその損害高を、一圓のものは一圓といふ風に正確に拂はせる必要はありません。「子供は常に責任を持ち、そして何かを壊したならば其れを償ふことを何かしなければならぬ。」といふ考へを養ふのが第一歩です。しかし子供が物の代價をもつとよく知つてきたならば、もつと明白と値踏みさせなければなりません。けれども、子供はどんな場合にも必ず損害

高の全額を拂はなければならぬといふことはありません。或る少女がお母さんの手傳ひをしてお皿を洗つてゐましたが、過つて落して割りました。このやうな場合には娘は割つた皿を新しく買ふだけのお金を全部出さなくてもよいのです。或る一定の目的で物品を取扱つてゐて壊したのなら、その損害高の半分しか出さなくてもよいのです。しかし、こゝに或る子供があつて、その子が、手を觸れる必要もないのに、餘計なおせつかいを出して何かをいじくりまはして壊したといふやうな場合には、前の場合よりも多く損害高を負擔させられてもよいのです。

罰と賠償とを區別せよ

もし物品を故意と壊した場合には、勿論、損害高の全額を拂はせ、おまけに

罰を加へてもよいのです。子供が、自分の壊したものに對して責任を持つ場合には、一般に、其れを賠償するのが自然の罰であつて、その上に他の罰を受けなくてもよいのです。たゞ次ぎのやうな場合は例外です。即ち、子供が單に或る物品を壊したばかりでなく、故意とそれを粉微塵にしてやつたといふやうな場合です。このやうな場合には、損害高を拂ふのと、不親切な行爲を罰せられるのとは明白と區別されなければなりません。しかし子供は、故意とでよく過つて物を壊したとき叱られるといふと、二重の罰を受けたやうに感じます。そして、「あんまり勝手だ。」と考へるに違ひありません。然るに、もしも親が、この思ひがけなかつた損害を、靜かに、順序よく、説いて聞かせて、しかる後ち相當の損害高を出させるやうにしたならば、子供は、初めて親の命令通りにさへすれば損害が償はれるのだと感じるに違ひありません。

子供の行爲を裁判するときの加減

子供が、正當に、時としては寛大に、取扱はれてゐるのだと感ずるやうにするのが何よりも大切です。或る商人が幼い息子にラムプの包を開けさせました。息子はその用を果たせば五十錢貰ふ約束でした。ところが息子は價五十錢のラムプを壊しました。そこでお父様は息子に一文もお金を拂ひませんでした。お父様は五十錢のラムプ代を息子に拂ふお金から差引いたのですが、息子の方では、報酬なしで仕事をしたのだから不正當に取扱はれたのだと感ずりました。お父様は至極正當だと思つてゐましたが、しかし實は間違つて考へてゐたのです。父がその息子に事情をよく飲み込ませないうちは、息子は自分の方が正しいと信じてゐたのです。是れは當然のことです。父は息子に次ぎのやうに言ひ聞か

せなければならなかつたのです。「わしはラムプだけ損をした。お前は仕事賃だけ損をした。ラムプの壊れたのは思ひがけない出来事で、お前がやらうと思つてやつたことではないのだから、この損害は二人で負擔することにしたのだ。」

も一つの場合では、十二歳になる男の子が馬を轆につけようとしてゐましたが、ちよつとの間、一方の轆にだけ繋いで置きました。馬は歩き出しました。そして、轆が片方だけ重いのに氣がつくと同時に、驚いて走り出しました。轆は壊れました。お父様はその子供に轆の代價の半額だけ負擔させました。子供は逆はずにそれを拂ひましたが、やがて、「馬のしたことに僕は責任を持たない」と言ひ出しました。子供は轆の片方にだけ馬を繋いだことをお父様に隠して言はなかつたのです。そして他の子供が傍にゐて馬を見てくれるものとはばかり思

つてゐたのだと言ひました。それだから子供は自分の不注意で馬が暴れたのではないと主張したのです。そのときお父様は腹を立てました。そして子供は依然として「お父様が無理だ。」と思ひました。即ち「自分は正當に取扱はれてゐるのではない。」と思つたのです。もしこの場合最初から子供が金銭上の責任を重んずる氣風を充分養はれてゐたのなら、お父様の裁決を決して無理だとは思はなかつたでせうが、何しろ今初めて金銭上の責任を負はせられたのですから、たとへ事件が自分の不注意から起つたことにしろ、自分までがその損害賠償を負擔するのを大へん不當なことのやうに感じたのです。

他人のためにもお金を使へ

子供は物品の場合に限らず、すべての事に責任を負ふやうにならなければな

りません。もし子供が充分お金を貰つてゐるのですと、いつも自分のことは自分で片づけます。クリスマスや誕生日の贈物を買ふときにも、子供は自分のお金で買ふやうにならなければなりません。教會や日曜學校や其他の會への獻金も、自分の貰つたお金の中から出さなければいけません。少し大きくなつては、級や會の費用も子供自身の財布から拂はなければなりません。各自の使ふお金は勿論のことです。子供の娯樂の費用は矢張り子供自身のお金から出さなければなりません。しかし、修養上の、また教育上の目的で、親の意見に従つて何かをする場合には、その費用は親が拂つた方がよいのです。勿論、時々、親が自分のよしと思ふまゝに自由に子供を取扱ふのは差支へないのです。黙つてゐても子供が金銭上の責任を負ふべきときには負ふやうになれば、金銭教育が最もよい効果をあらはしたのです。子供は、自分の衣物を買つたり、

家の人達に何か御馳走したりするときは、大へん得意になるものです。金銭教育の最高の目的は、單に自分の欲しいものを買つたり、自分の思ふことをしたりするためにはばかりお金を使はないで、他人を楽しませることにちもお金を使ふやうになることです。

子供の金銭上の責任に關する代表的な實例

子供が物品を壊した場合に親のとるべき態度や、それが子供にどんな影響を與へたか、といふやうなことは、次ぎの實例をみて分る通り、場合によつて色々に異ひます。

「子供の時分、わたしは、物を壊したり損じたりしても別に責任を負ひませんでした。價の高い皿を割つたときには、わたしは叱られました、代價を拂ふ

やうには言はれませんでした。壊したものが安つばいものですと、叱られることもありませんでした。けれども、時々、わたしは、圖書館から借りた本を期限までに返さなかつたので、餘計な損料をとられました。わたしは壊したものの損害賠償をしたことは實際に一度もありません。」

「わたしは物を壊してもお金を拂つたことはありません。そしてわたしのお父様は、わたしの大へん欲しいものや必要なものは何時も新しく買つて下さいました。わたしは、物を壊したり損じたりしても、そのために叱られたことも罰せられたことも曾てありません。その代り、お父様は、「こんないゝものを持つてゐる子供は少ないのに」と仰言つてわたしを悲しがらせました。そしてわたしがお父様からいたゞいたものを好まなかつたり粗末にしたりすると、お父様は、それを欲しがつてゐる他の子供に呉れてやるのでした。わたしが何か壊し

たときのお父様の悲しさうな御様子、わたしの心を痛めました。壊したものの代りの品物は大概新しく補はれましたが、わたしはその新しい品物をちやんと覚えておりましたから、持つてこいと言はれたときまじまじと叱られるやうなことはありませんでした。わたしは本の頁を破つて、それを繕つたのを感じてゐます。そして、わたしは頁の破れを繕ふのが厭でしたから、その後は本を損じないやうによく氣をつけるやうになりました。

「わたしは子供の時分は、何かを壊すと非常に心を痛めました。そのとき誰も傍に見てゐなければ、わたしはお母様に壊したことをなるべく隠すやうにしてゐました。そして、出来るだけ長く放つておきました。けれども、結局はお母様に話さなければならぬやうになるのです。わたしは物を壊しても、お唇を打たれたことは覚えてゐませんが、しかし、その代りお母様はわたしの不注意

を責めました。また極く嚴肅に叱ることもありました。けれども、それが過ぎて、大きな重荷がわたしの心から取去られたときには、わたしは直ぐ何もかもけろりと忘れてしまふのでした。」

「二三年前の或日、わたしは、遊戯の好きなお友達と一緒に遊びに出かけてたまりませんでした。お母様は申しました。『遊びに出てもいゝけれども、行く前にお前の衣物の綻びを繕ひなさいね。時が過ぎればまた餘計な手数がかゝるといふことを忘れないでね。』ところがわたしは忘れませんでした。そして衣物を繕はないで飛び出しました。丁度面白く遊んでゐる最中に、衣物の小さな綻びが釘に引つかつて、知らないでゐるうちに衣物の縁がみんな裂けてしまひました。わたしは遊戯を止めて家に歸りました。わたしは自分で衣物を繕はなければならぬことに氣が付きましたが、それと同時に、日の暮れるまでかゝらなければ

ば、どうしても出来上らないことに気がつきました。お母様はお針道具をわたしにお渡しになりながら申されました。「時が過ぎれば餘計な手数。」毎土曜日にお母様はわたしに廿錢づつ下さることになつてゐましたが、この日はお母様に「これから二月の間お金を上げないよ。」と言はれたので大へん失望しました。新しく衣物を買ふために二月間お金を溜めなければならなかつたのです。わたしは二月お金が貰へなかつたお蔭で、一枚の遊戯服が何程するものであるかといふことを實際に悟つたのです。」

「わたしのお父様は、何か壊してもわたしを罰しようとはなさいませんでした。お父様のお考へでは、誰でも壊さうと思つて壊すのではない、つい気がつかずに壊すのだといふのでした。今でもこのお考へです。わたしは子供の時分、さう澤山物を壊しませんでした。」

「例へば窓のやうなものを壊したときには、わたしは何時も打たれました。しかし家の人達はそれだけの代價を拂ふのでした。」

「故意にしる偶然にしる、他の家のものを壊したり破つたりすると、わたしはお父様からそれだけの代價をわたしの財布から拂ふやうに命じられました。わたしの家のものを、偶然に壊したときにも、わたしは矢張りそれだけの代價を拂はせられました。もし故意に壊したときには、罰せられて、おまけに代價を拂はせられるのでした。」

「わたしがお皿を割つたときには、別に代價を拂はせられませんでしたが、お母様はきつとお機嫌が悪いのでした。もしよいお皿のときには、お母様は非常に悲しみましたから、わたしは大へん自分のしたことを恐ろしく思ふのでした。わたしは自分のものを壊したときには、一番眞面目な心持になるので



した。學校では、何か壊せば必ず代償を拂ひました。私の通つてゐた私立學校では、校長が常に私達に、何か壊したなら直ぐ報らせるやうと申して居りました。そして校長が其の事件を處分するのでした。そこで私共は、何か壊しますと、先づ初めに、それを校長に報らせなければなりませんでした。そしてその次に、校長の裁決に従つて、損害賠償をするのでした。」

「わたしは十六歳になるまでは、ラムプのやうな小さな壊れやすいものゝほかは、何も破つたり壊したりしたことがなかつたやうです。わたしが、このやうな壊れやすいものを破つたときには、いつも厳しく叱られました。しかし、お皿を洗つてゐる最中に、思はず指から滑り落ちて一枚割つたといふやうな場合には、大して叱られませんでした。わたしはそのたび毎に前よりも少しづつ注意深くなつたやうです。一度お母様の大好きなお皿を割つて、叱られるのが恐

ろしくて、灰桶の中へそのお皿を隠したことがありました。しかしたうとう見つかつてお母様に大へん叱られました。」

「わたしは五歳ばかりのとき、お祖父様のお手傳をして庭の雑草をとるのが大好きでした。或る日お祖父様は、雑草の害を説いて聞かして下さいました。二三日過ぎて、わたしはお隣のお庭に遊んでゐて、その小さなお庭が雑草で一杯になつてゐたのに気がつきました。わたしは早速やり初めました。そしてその雑草をすつかり取除いてしまひました。わたしはその雑草を二三本家へ持つて歸つてお祖父様にお目にかけてながら、今日自分のした事をお話しました。お祖父様はその雑草を御覽になつてから、これは雑草ではなく、赤大根だと教へて下さいました。わたしは、他人のものには決して手を觸れるものではないと言ひきかされました。わたしはきつと罰せられることゝ思つてゐました。お祖父

様はわたしに時々お金を下すつて、そのお金を集めて赤大根の種子を買ふやうにと仰言いました。しかしそれだけでは私には罰せられたやうな気がしないのにお祖父様は氣づかれました。そこでお祖父様はわたしに厳しい罰を加へる計畫を立てられました。わたしはどんな子供よりも、知らない人を怖かながりました。よく知つてゐる人とでなければ決して口をきかなかつたものです。そこでお祖父様は、わたしに赤大根の種子を一袋お渡しになつて、これを持つてお隣りに行つて、先日のことを話してこいと申されました。それがわたしにとつて、どんなに辛いことだつたか、誰も想像がつかないでせう。わたしは決してそのときのことを忘れることが出来ません。その後、何か悪いことをしたたんびに、わたしは同じ方法で罰せられました。両親はこれが何よりも効果のある罰だといふことをよく知つたからです。」

「幼い時分、わたしは自分の人形や玩具にはちやんとしるしをつけて置きました。兄弟も姉妹も矢張りさうして置きました。わたし達は、戸棚や箆笥の引出しに、各自の置き場所を持つてゐました。わたし達が、他の者の人形を占領したり、失くしたり、壊したりしたときには、必ず、持主にあやまらなければなりませんでした。そして或る時は自分の人形を代りにやつたり、またはそれだけの代價を拂つたりしました。わたし達は、自分の玩具や持物を大切にすればかりでなく、他の家のものも凡て大切にするやうに教へられました。もし過つて窓とか、ラムプのホヤとか、笠とかいふやうなものを壊したときには、かねて斯ういふときの用意に備へてある各自のお金で、代價を拂はせられました。もし代價を拂はなければ、その代り特別の仕事をしなければなりませんでした。大概の場合、わたし達は、壊したのと同じものを買ひに街の店へ走つて行くの

でした。そしてそれを大へん恐ろしい罰のやうに思ふのでした。」

どんな目的で子供を罰するか

子供の心を注意深くするやうに訓練する方法は澤山あります。親達が子供を叱つたり罰したりするのも、不注意の結果が如何に辛いものであるかといふことを子供に思ひ知らせ、もつと注意深い子供にしたいからです。叱つたり罰したりする代りに、悲しい容子をみせる親達も、矢張り、物を壊せば人に苦しみと與へるといふことを子供に深く思はせて、その子供をもつと注意深くしよと願つてゐるのです。また一方には損害高を賠償させる親があります。この種の親達は「行為には必ず結果が伴ふものであるから、誰でも自分のしたことには責任を持たなければならぬ。」といふ根本的眞理を自分の家庭に知らせる

のです。この通り方法は色々あります。けれども親達が、自分自身の訓練や自分自身の人生哲學に反對した方法で子供を取扱ふのは困難ですから、各自のよいと思ふ方法をとるのがよいのです。近代科學は、原因と結果の理を明らかにしました。そして教育家は、刑罰といふものは、かうなるのが自然の結果だといふことを思ひ知らせるべきものだと言張ります。單に苦痛を與へたりなんかするだけでは、刑罰の眞の目的を達したとは言はれません。即ち、これは不自然的刑罰ではなくて、ヘルバート・スペンサーの自然的刑罰説に従つてゐるので

## 第十二章 衣服を買ふこと

## 子供は必要品を買ふ氣を起さぬ

子供がお金を貰ふと、多くの場合、慰樂品とか、または餘り必要でもないものを買ふのに使つてしまふものです。けれども、或る親は子供にお金を與へるにしても、そのお金で衣服のやうな必要品を買はせるやうに計畫を立て、與へます。そして幼い者に金錢の使ひ方を教へようとするのです。或る子供は、自分の儲けたお金で、または他のことに使ふつもりで貰つたお小遣で、衣服を買ふことが出来るのを大へん得意に思ふものです。

## 子供のお金を全部必要品に費はせるのはよいか悪いか

多くの子供は十代になるまでは自分で自分の衣服を買ひません。多くの場合、餘り早くから、衣服を買はせるつもりでお小遣をやるのは愚の至りです。なぜといふに、子供は充分將來のことを考へることも判断することも出来ないからです。その上、子供は現在の欲望にばかり目をくれて衣服のことは思はないのです。だから、衣物には餘り少しお金を使つて、他のことには餘り多くお金を使ひ過ぎるのです。けれども、十代になると、社會的本能や性的本能が發達するから、大概の子供は、人真似がしたくなつたり、お友達と同じ衣物を着たがつたりするのです。子供に初めから色々なものを自分のお金で買はせる方針を行ふ場合の最も恐ろしい危険は、子供がお金を貰ふと直ぐ使つてしまつて、買